

うなのです。淑子さんと光子さんとは、日ごろ姉妹も及ばないほど親しいお友だち、ところが今度の會について、淑子さんは幹事になつて居るけれども、光子さんは幹事でないのです。それで淑子さんは皆と一緒に寫眞を撮るのに、光子さんはその仲間入りが出来ないといふので、

『ちやあ私も寫さないわ。』

と、淑子さんが言ひ出したのです。光子さんは、

『あなた幹事だから、私に構はないでお寫しなさいよ。』

と言つて、はや涙ぐみました、それを見ると淑子さんも、光子さんを棄てておく譯には行かず、二人は扉にもたれて澁々してゐたのを、他のものは先からの位置の騒ぎで、それには氣がつかかなかつたのだといふこと。

そこで、すゝり泣いて居る二人を賺して、ともに寫眞の列に入れましたが、折角位置の保たれたものも、その事件のためにまた動き出して、容易

に元の通りになりません。それやこれやで手間取つてゐるものですから、室内にゐる會員の中には、いつまでも待たされるのを不平に思つて、苦情を言ふものさへ出来ました。

『さあ〜、お早く願ひます。』

と、寫眞師はシャツターを握らうとしました。が、やはり中央の邊にゐる少女は、

『あなた、前へお出なさいよ。』

『厭よ、私こゝで見えないやうにして居るわ。』

と、いつまでも席を譲り合つて、正しい位置を取らない様子。寫眞師も、もう仕方がないと思つたのでせう、きつと顔色を改めて、シャツターを握りました。その一刹那、やかましかつた中央の少女の聲がピタツと止んで、漸う撮影を終りました。



驚く勿れ、寫真を撮るのに要した時間が一時間、待たされる他の會員から苦情が出たのも、無理ではありません。誰のために、こんなに手間取つたのでせう。

### 五三 着物よりも書物

信子さんは、着物よりも學用品よりも、何よりも書物や雑誌を欲しがります。リボンを買ふお金があれば、すぐに書物屋の店前に立つて、何か新しいものを買つて来る。筆墨を買つて三錢五錢のお釣銭があると、それを溜めておいて月初めに雑誌を買ふといふ風です。

それほど書物が好きなのに、悲しいことには家が貧乏なので、欲しいと思ふ書物は山ほどあつても、なか／＼それを買ふことは出来ません、欲しい



△着物よりも書物▽



欲しいと一年ばかりも前から思ひつめて、少しづつのお金を蓄へておき、漸くのことで一冊買ひ求めると、鬼の首でも取つたやうに喜びます。

それですから、お友だちの家へ遊びに行つても、信子さんが第一に眼をつけるのは書物箱で、

『あの、一寸あれを見せて頂戴な。』

と言つて、見たい書物を借り受け、その場で讀み耽るといふ有様。もし仲のよいお友だちが、何か良い書物を持つて居りますと、信子さんは、もうそれが讀みたくて讀みたくつて堪らないので、

『あの書物があいて居るなら、二三日貸して下さいな、大切に讀みますわ。』

と言つてそれを借りて歸り、夜も眠らずに讀み終ることが度々あります。いつでしたか、お友だちに借りた歴史の書物があんまり面白いといふの



で、幾度讀んでも讀み飽かず、さりとしてそれを買ふだけのお金もないし、とうとう二百三十ページの書物一冊を、十日あまりの間に寫してしまつたといふ位。信子さんのやうに熱心な少女の手に渡つて愛讀されたら、書物もさを満足なことだらうと思はれます。

信子さんは、さすがに書物が好きなだけあつて、貧しい家には不似合ひなほど、立派な書物を澤山持つて居ります。身をかざるものと言つては、質素な一通りの衣服があるだけで、たいもう本箱に書物の殖えるのを楽しみにして居ります。もし誰か、信子さんに向つて、

「貴女、そんなに書物ばかり買はないで、新しい帯でも拵へなすつたら如何？」

と言つて御覽なさい、信子さんの答へは、

「帯や着物は、大きくなつてお金が出来たら買へますわ。書物を讀むのは、

今の中でなければ、いつでも讀めるといふ譯に参りませんもの、私讀める時に、ドシ／＼讀んでおきたいわ。」

信子さんのやうな讀書家が、一人でも多くなればなるほど、日本の女子の品位は高まつて行くことだらうと思はれます。

### 五四 三度の喜び

「今日は私、ほんとに嬉しいことがあるのよ。」

と喜美子さんがニコ／＼して居ります。

「どうしたの？ 好い指環でも買つて頂いたんですか。」

「いゝえ、そんなことぢやないの、指環なんか何でもないわ、もつともつと嬉しいことなの。」



「ぢやア、好い着物が出来たの？」  
 「い、え、指環だの着物だのつて、そんな品物のことぢやアないのよ。」  
 「品物ぢやアないつて？ それぢやア叔母様と活動寫真にでも行くんだね。」

「あら厭だ、そんなことぢやないわ。」  
 と言ひますから、それではどんな嬉しいことかと尋ねて見ますと、喜美子さんの答は斯うです。

喜美子さんのお友だちに秀子さんといふのがあります。その秀子さんは、お家が貧しいのを卑下して、性質が變にひねくれて居るものですから、學校でも何となく皆に厭がられて、いつも寂しい思ひをしてゐました。たゞ喜美子さんだけは、かげながら同情を表して、前から親切にしてやりました。けれども秀子さんは、一體に邪推ぶかい性質なので、親切な喜美子さ

んに對しても、いつも疑ひの眼を見張るといふ風で、なか／＼打ち解けませんでした。

ところが、つい近ごろのこと、秀子さんのお母様が亡くなりました。喜美子さんは、日ごろ寂しげな秀子さんの心の中を、一しほあはれに思ひやつて、母なき後の貧しい少女をいたはり、何くれとなく世話をしやりました。

秀子さんとても、もとより木や石ではありませんから、人の親切を有りがたく思はない筈はありません。殊にお母さんが亡くなつて、悲歎の涙にくれて居る時に、やさしいお友だちに慰められたものですから、これまでのひねくれた性質も和らぎ、一しほ深く感動したと見えまして、

「ほんとに私は嬉しい。お母さんが亡くなつてしまつて、どうしようかと心配してゐたのに、あなたのやうな親切なお方に慰められて、どんなに心



強いが解らないわ、どうぞ喜美子さん、いつまでも見放さずにゐて頂  
 な。私はこれまで随分憚んだ心をもつてゐたと、自分でもさう思ふん  
 けれど、もうこれからは貴女を姉様と思つて、ほんとに善い人間になり  
 すわ。ね、だから哀れと思つて導いて下さいよ。ほんとに貴女のお蔭で、  
 私斯うやつて心を入れかへることが出来たんですわ。』  
 と、涙ながらに喜美子さんの袖に縋つて、心から感謝したといふこと。  
 喜美子さんは、秀子さんがさういふ優しい心になつたのを見て、漸く自  
 分の誠心が通じたのだと、何よりも嬉しく思つたのです。  
 他人に親切をつくしますと、その親切を受けた人が喜ぶばかりではなく、  
 自分もまた同じやうに嬉しいものです。而して、その親切が先方に通じた  
 のを見ますと、更にもう一度喜ばしい感が起ります。  
 つまり親切とか恵みとかいふことは、それを施すときの喜ばしい氣もち

と、それを受けたものが喜ぶ心と、さらにその喜びを見た時に感ずる喜び  
 と、合せて三度の喜ばしさを味はふことが出来るのであります。喜美子さ  
 んのやうに、三度の喜びを感じ得るものは、まことに幸福な身分と言はね  
 ばなりませんまい。

### 五五 足を痛めて七ケ年

次に記すのは、少女美談と言つた方がふさはしいかも知れませんが、  
 名は美保子さんといふのです。九ツの年に足を痛めたのが、だんく悪  
 くなつて、遂にはあるくことも出来なくなりました。  
 両親の心配は一通りではなく、名高い専門醫に診察してもらふやら、温  
 泉へ湯治に連れて行くやら、さまざまに手をつくしましたけれども、美保



子さんの病氣は、依然として快くなりません。可哀さうに美保子さんは、學校へも僅かに三年の半ばまで行つたけで退つてしまひ、一室に閉ぢ籠もつたまゝ、さびしい月日を送るやうになりました。

もとより素直な内氣な少女ですから、外へ出て遊ばれなくなつたからとて、別に不平らしい顔も致しません。それでも同じ年頃のお友だちが、快活な装ひをして、楽しさうに學校に通つたり、春はお花見に出かけた。りするのを見ますと、さすがに羨ましくもあるし、わが身の不幸を悲しく味は、ぬでもありませんでした。

併し、歩行は出来ないながらも、追々に足の痛みが薄らいで參りますと、精神に異状はないのですから、美保子さんは獨り居の退屈まぎれに、少しづつ、書物や雑誌を讀みはじめました。學校は僅か尋常三年までしか行かないのですけれども、あとは振り假名をたよりに、毎日のやうに獨りで雑誌

類を讀み習つたものですから、その讀書力は次第に進んで參りました。

戸外の運動が出来ない美保子さんは、明けても暮れても、心を慰めるものと言つては、讀むことゝ書くことゝばかりなのです。而して、外に氣を散らしませんから、讀み書きの力だけは、學校へ行つて居るものよりも、却つて進歩が早い位。

學力が進めば進むほど、讀むことが面白くなつて來るものですから、美保子さんは雑誌類は言ふまでもないこと、年に似合はぬ高尚な書物をも繙き得るやうになりました。あんまり美保子さんが熱心になつて、毎日讀み書きばかりに耽つて居りますので、お父さんやお母さんは、もし身體のために悪くはないかと心配して、

『美保子、お前そんなに勉強すると、身體に障るよ、暢氣に遊んでゐる方が好いだらう。』



と、仰ッしやつても、美保子さんは  
 『だって私、ちつとして居るより、斯うして書物を読む方が、慰みにな  
 るんですもの。』

と、さびしう微笑んで居ります。それで両親は、何か美保子さんの保養に  
 なることはないかと、いろ／＼考へた上で、お琴の師匠と、美保子さんの  
 仲よしのお友だちとを家に招いて、毎日一二時間づゝ、遊びながらお琴の  
 稽古をさせることになりました。

すると美保子さんは、大さうこれを喜んで、その後はまた、読み書きの  
 外に、お琴にも熱心になりまして、すん／＼上達するといふ有様。さうな  
 つて來ますと、両親の眼からは、今度はお琴の稽古が身體のために悪くは  
 ないかと、心配で／＼たまらなくなりました。病身な子供を持つ親の心は、  
 さま／＼に思ひ悩まされるもので、美保子さんのお父さんやお母さんも、

可愛い娘の心を慰めんがために、珍らしい室内遊戯の道具を買つて來たり、  
 美しい繪本を見せたりして、あらん限りの手段をお盡しになりました。

美保子さんは、両親の情ぶかいお心を察して、どんなことでも決して厭  
 と言つた例がありません。足は悪くても、手先で出来る仕事なら、まめま  
 めしく両親のお手傳ひもしますし、自分のことで他人に迷惑をかけぬやう  
 にと、それは／＼壯健なものでも及ばないほど、何事もよく取り片づけて  
 おきます。その上、物事に熱心な性質ですから、お琴でも、繪でも、敷島  
 の道でも、あどけない遊戯でも、一たびこれに手をつけますと、普通の少  
 女よりも上達が早いのです。

斯ういふ風で美保子さんは、學校へ通はなくても、女學校の生徒より以  
 上の學力を持つて、高尚な書物も読み、立派な文章も書き、すぐれた和歌  
 俳句も作りますし、一通りの技藝は何でも致します。



足を痛めてから今年で七年、もしこれが壮健な身体なら、海老茶袴を胸高に穿いて、房房しい髪に華美なりポンを翻へし、晴々した姿で女學校へ通ふといふ十六の春、眉目美しい美保子さんは、人知れず寂しい一室を天地として、朝夕、獨學獨習に餘念もありません。而も、その不幸な境遇を、自分からは少くも恨まず悲しまず、いつもにこやかな顔つきで、ひたすら兩親の心を安めるやうにと努めて居ります。

廣い世の中には、美保子さんのやうな不幸な少女が、決して少なくはないのでせう。それを思へば、靈肉ともに健やかに生れたものは、たとひ家が貧しからうとも、苦しい仕事に従はうとも、それは神様の仰せと感謝の意を表はして、ますます努め勵まねばならぬではありませんか。

### 五六 十五の春まで

「お母様、いつになつたら私、外へ出て遊ばれるやうになるのでせう？」  
南に面した暖かな一室に身を横たへてゐた浪子は、枕もとの母を見上げて斯う申しました。

「暖かくなつたら……春になつたら快いでせうよ。母さんも今そのことを思つてゐました、けれども病氣ばかりは、あせつても仕方がないからね、まあ氣をながくして。」

と、慰める人も、毎日のことなので、もう言葉も盡きたかのやう。  
九歳の年の夏、床についてから十五の春まで、この狭い病室を天地として、送る日も迎へる朝も、戶外へ出ることが出来ないのですから、浪子は言ふまいと思つても、つい斯う愚痴が出るのでした。



學校へ行かれないので、少し身體の加減のいい時を見て、浪子は母さまから読み書きを教へられました。假名をたよりに繪本やお伽噺の本を読むやうになつて、どんなに氣がまぎれたか知れませんが。學問は好きな方で、閑さへあれば自分から進んで、枕元の雜誌類をひろげて読みもしますし、その時の感じを書いても見ました。

たい寂しいのは、お友だちのないこと。——幼い時分に仲よく遊んだものも、浪子が病氣になつてからは、學校へ行かない人とは遊ばないと云つて、誰一人音なうてはくれません。

『獨りぼつち！ やさしい父母もあり兄弟もあるのに、私は獨りぼつち。いつになつたら、お友だちと楽しく遊ぶことが出来るだらう？』  
と思ふと浪子は、言ひ知れぬ寂しさに、行く末のことが心ぼそく案じられてならないのです。併し、不治の病は、いくら手をつくしたとて、なかなか

か恢復しさうにもありません。

『あゝ健康！ 何はなくても構はないから、たい健やかな身になつて、野の鳥のやうに自由に自由に駆け廻つて見たい。』

浪子の今の願ひは、たいこれだけなのです。  
花さく春を迎へ、もみぢ散る秋を送つて、浪子の重い枕は、何時あがることませう。

五七 電話交換手

『北國の冬は、沈黙の時期です。この淋しい田舎に生れて、それと運命を共にせねばならないのかと思ふと、私のやうな病む身には、一しほ淋しう感ぜられます。』



と、鶴子は都の友に送る手紙の一節を書きました。

鶴子には父母もあり、兄もあり、弟妹もあつて、家庭の温かさは味はふことが出来ますけれども、たゞ一つの悲しみは、生れつき身體の弱いこと。病身で物事を考へることが好きな性質ですから、鶴子は學校では何時も優等の成績を取りました。父母はいふまでもないこと、學校の先生たちも、鶴子の將來を思ひやつて、どうか身體が丈夫になるやうにと祈りました。けれども生れつき病弱な身體は、小學校を卒業する時分になつても、やはり手荒な仕事には堪へられませんでした。

鶴子が高等小學校を卒業した時、はじめてその町に電話交換局が設けられました。身體が弱かつたのと、家庭の事情とのため、鶴子はすゝめられて電話交換手の試験を受けましたが、もとより試験には首尾よく及第しました。

毎日、交換局に勤めるやうになつてからも、鶴子は閑さへあれば書物を読むことが好きでした。さうかうして半年ばかり過ごした或る日の夕方、勤めを終つて家へ歸りますと、どうしたものか、不意に耳が聞えなくなりました。

『どうしたんでせう、痛くも何ともないのに、だゞ聞えないのよ。』と、自分から不思議がる位でした。両親は驚いて、早速醫師の診察を乞ひましたところ、可哀さうに、鶴子の耳疾はもう一生なほるまいとのこと。折角勤めてゐた交換手の仕事も、その日限り出来なくなりました。

續いて鶴子は、またもや眼を病みました。重ね々々の病氣に、どうしてよいのか解らない位、鶴子はしみじみと身の不幸を歎きました。急いで手當をしたものですから、眼だけは漸う見えるやうになりましたけれども、兩方の耳は今なほ聞えません。



『さなきだに弱い身體で困つてゐたのに、斯う病みつけで、耳が聞えなくなつたのですから、私はたゞもう悲しくて仕方ありません。お正月やお祭りの日に、晴着とか、リボンとか、袴とか云つて、樂しう遊んでゐらつしやるお友だちを見ますと、あゝ私は……私はこの弱い不具な身體が恨めしくてなりません。』

と、鶴子はまた手紙の一節に書き加へました。

弱い身體！ 寒い北國！ 鶴子のわびしさはどんなでせう。

### 五八 病院の窓

『今日は暖かいのね、こんな日にやあ何處かへ遊びに行きたいわ。』

白いベッドの上に起き直つた雪子は、今日は殊さら氣分がよいと見えて、

附添ひの看護婦に話しかけました。

『さうでございますねえ、今日は風がありませんから、お庭へでも出て御覽になりますか。』

『お庭ぢやアつまらないわ。』

と云つて、茶色のカーテンを半ば掲げたガラス窓から、外の景色を見やりながら、

『私、まだ退院出来ないでせうか。』

『さあ、今日のやうに宜しければ、もう四五日でせうと思ひますけれど。』

『さう、院長さんは何と仰つしやるでせう？ 私何だか今日は家へ歸つて

見たくて仕方がないのよ。お父様もお母様も、ちつとも見舞ひに来て下さらないんですもの。』

『お家でお忙がしいんでございませう。それに貴女がだん／＼快くなつて



ゐらつしやるんですから、お家でも安心してゐらつしやるんでせう。』  
『でも、もう今日で一週間、誰も来て下さらないなんてあんまりだわ。』  
と、何時になく怨むやうに申しました。

なんにも知らずに、淋しい病院の一室から両親を戀しがつてゐるかと思ふと、側で聞く看護婦は、雪子の痛々しく瘦せた姿を見るにつけても、その心根がいぢらしくてたまりませんでした。

『もう一週間になりますかねえ、ほんとに月日の経つのは早いものです。』  
と！ ぢやア今日あたりお母様が入らつしやるかも知れませんよ。早く快くおなりになつて……。』

と慰めかけて、思はずホロリと涙を落しました。

雪子が呼吸器を痛めて、こゝへ入院してから、はや一ヶ月ばかりになります。はじめの中には、お父さまとお母さまが代るゝ一日おきに見舞

ひに来て居られましたのに、この一週間といふもの、全くその足が絶えてしまひした。

入院中の雪子の耳に入れては、病氣に障るからといふので、誰も知らせませんでしたが、雪子のお父様は、五日前に急病で亡くなられたのです。お父さまの亡くなつたのも知らずに、家を戀しがり、遊びに出たがつて居る雪子の境遇、思ひやるさへ哀れではありませんか。お父様が亡くなつたといふことを聞いたら、雪子はどんなに歎き悲しむでせう。

五九 病院

よ り  
(一少女より友に)

百合子様！

昨日はわざわざお見舞ひ下さつて、ありがたう御座いまし



た、あの時は私、ほんとに嬉しかつてよ、病氣のことも何も忘れてしまつて、楽しい楽しい半日を送りましたわ。

お別れする時の厭でしたこと、またその中に来て下さるとは知りながら、何だかもう自分お目にかゝれないやうな氣がして、そりやア悲しう御座いましたわ。私、あの時は、看護婦に叱られるのも構はずに、あなたの後影が見えなくなるまで、伸びあがるやうにして扉口に立ちつくしましたの。あなた、お歸りが遅くなつて、母上様にお叱られなすつたでせう。あんなに無理にお引き留め申したのですもの。許して頂戴な。

私は、昨夜も安眠いたしましたのよ。今朝も氣分がよい方で、斯うして手紙を書くことが出来るのですから。どうぞ安心して下さいね。早く快くなつて、お轉婆をしたいと思ひますわ、學校のことなんかを思ひ出すと、斯うして白いベッドの上に横たはつて居るのが何よりも悲しくて、ほんと

につまらないことよ、試験前だといふのに。

でも百合子さん！ そんな我がまゝなことは言はれないわねえ、病氣の時は、氣が弱くなるためか、物のあはれがしみんと解りますよ。この病院にだつて、随分お氣の毒な方がゐらつしやるのよ、そのことを思ふと、私なんかは、たとひ病氣でも幸福な病氣ですわ。それに私、今度の病氣では、つくつくと父なる神の御恵みといふことを感じましたの、生意氣なことを言ふやうですけれども、病氣をしたゝめに、神の教へを聞くことが出来るたのではないかと、ひとりで考へますのよ。肉體が苦しみを受ける代りに、心靈の慰安を得て、深く神の御恵みを感謝して居りますの。

百合子さん、昨日ね、あなたがお歸りになつてから、私、聖書を繙いて居りましたのよ、而してあの『明日のことを思ひ煩らふなかれ、明日は明日のことを思ひわづらへ。一日の苦勞は、一日にて足れり』といふ句を讀



んで、ほんとに嬉しい気がしました。その日その日に、神の教へを守り、神の仰せに従うてさへ居れば、何もさきくのことを心配するには及びませぬわねえ。全く、何時どんな所でいも、神の恵みを受けて居ると思へば、こんな嬉しい心強いことはありませんわ。百合子様、私は病氣をして居りまして、神様はやつぱり護つて下さるわねえ。病院の暗い所にも、さびしいベッドの上にも、神様は居らつしやるのですもの！

百合子さま、私は斯う思つて、もう暢氣に療養しますから、決して御心配遊さないで下さい！ その中に追々快くなるでせうから。

病院生活も、一度は経験になつて好いかも知れませんが。さびしいのは寂しいけれど、その寂しみの中にも、いろいろなことを考へるのが、何となく楽しみなものですわ。私、入院中に身體を良くすると共に、出来るだけ心をよくして、神の御旨にかなふやうな人間になりたいと思つて居りますの。

皆様に宜しく申して頂戴な、願ひよ。それからまたお関があつたら、お手紙頂戴な、待つて居ますわ。では左様なら！

### 六〇 姉 と 妹 と

廣い世の中には、はかり知られぬ悲しい境遇に泣き暮らすものも多いのです。今こゝにお話申さうとする少女の身の上なども、全く苦しみと悲しみとを味はふために、この世に生れて来たやうなもの。私はその悲惨な有様を實際に見て、しみくと哀れな感じに打たれました。事實は小説よりも悲しいとは、このことでせう。

さみ子さんは八つの年に大煩ひをしてから、今年十四の秋まで六年の間、



どういふものか身體が弱くて、始終ぶら／＼して居ります。はじめは病後の疲れたと思つて、追々に快くなるのを心待ちにしてゐましたが、その後一年経つても、二年を過ぎても、一向快くなる驗が見えません。仕方がないものですから、とう／＼學校も退つてしまふ、すきなお琴の稽古もやめる、あまり戶外へも出られなくなるといふ有様で、わびしい月日を室内に送らねらばならぬやうになりました。

ながい間、家の内にばかり閉ぢ籠もつて居りますと、子供の時から親しくした無邪氣なお友だちも、だん／＼遠ざかつて、今では一緒に遊んでくられるものもありません。斯うなると妙なもので、きみさんはむやみに人懐かしがります。わびしい雨の日の退屈さに、瘦せ細つた青い顔で、ちつと庭の面を眺めて居るときなどは、はじめて學校へ手を引いて行つた時分のお友だちが、戀しくしのばれてたまらないのでした。八歳の時に學校を

退つたのですから、字を書くことも本を読むことも、たい折々姉さんに教へられただけで、あとは皆獨學、それでもお友だちの懐かしさに、まはらぬ筆で手紙を書いたことが度々あります。

寂しく暮れ行く夕、うす暗い部屋に朧をついて寢そべつて居りますと、たまらなく人戀しさの情に満たされて、われ知らずホロ／＼と涙を流すこともあります。併し、健やかなお友だちは、殆んど皆きみさんのことを忘れたやうに、滅多に音づれてはくれません。

姉の輝子さんはこれを可愛さうに思つて、ながい年月、一度も厭な顔もせず、よく面倒を見てやりました。早くからお母様に別れた姉妹は、お父様はあつても、お役所の御用が忙しいものですから、さう親しくお話をし合ふ暇がありません。外に頼るものゝない姉妹は、まるで母子のやうに力になり合ひ、且つ慰め合つて居りました。



「姉さん、私ほんとに濟まないわ。姉さんにはかり御心配をかけて……私  
いつになつたら、仕事が出来るやうになるでせう。」

「そんなこと言ひつこ無しよ。きみちやんは氣が弱いから、そんなことは  
かり考へてゐるのねえ。もうなんにも考へないでゐらつしやい、ね、身體  
だつてだんく快くなつてるぢやありませんか。」

「え、でも私、斯う毎日ぶら／＼してゐて、一生病身なのぢやないか  
と思ふと、何だか心細いのよ。」

何事にも感じやすくなつてゐるきみ子さんが、斯う言つてホロリと涙ぐ  
みますと、輝子さんは

「そんなことがあるものですか、いつか關野さん（醫師）も、養生さへすり  
やアきつと快くなるつて仰つしやつたぢやありませんか。きみちやんは、  
何でもさう思ふからいけないのよ、病氣は快くなると思へば快くなるし、



悪いと思へばなほ悪くなるんだから、そんな心細いことを言はないで、暢  
氣にしてゐらつしやいよ、ね。きみちやんがそんなこと言ふと、私も心配  
するわ。」

と言つて、慰めたり力づけたりするのでした。實際輝子さんは、きみ子さ  
んのことについて、どんなに心配したか知れませんが、表面でこそきみ子さ  
んの氣を落させないやうに、強いことを言つて居りますけれども、陰では  
幾度泣いたか解りません。「お母様さへ生きてゐて下さつたら……」と、詮  
ないことを思ひ浮べて、熱い涙にむせんだことも數へられない位。

きみ子さんは、親切な輝子さんを杖とも柱とも頼んで、弱い身體をすつ  
かり任せかけ、お友だちがなくて寂しい心を、たゞ姉の柔かな胸に預けて  
安んじてゐるのでした。

雨がシト／＼と降つて物淋しい夕、不幸な姉妹は夜更くるまで、さまざ



まの悲しいことを語り合ひました。

『あゝ、もうこんなお話は止ませう、ね、お父様に御心配をかけるばかりだから。……もう止して寝ませう、お父様もおやすみになつたやうよ。』

と、輝子さんはきみ子さんの寢床を舒べてやりました。  
『ほんとに、こんなお話を居ると、悲しくなるのねえ、私たち二人は斯うして寂しい一生を送らねばならないのかも知れないわ。……厭だ厭だ、ほんとにもう止して寝ませうね。』

と、きみ子さんは先に寢床に就きました。  
後片づけをするために寝おくれた輝子さんは、その夜、思ひがけなくサツと紅の血を吐いて倒れました。翌くる朝から、輝子さんの枕が上らなくなりしました。

輝子さんが病氣になつてからの悲惨な有様は、こゝにはもう記しませ

い。書けば書くほど涙の種、想へば想ふほど泣かすには居られません。永年ぶらくとして病んでゐる纖弱い少女が、急に大病になつた姉を看護しなければならぬのですから、その哀れな光景は、よその見る目も堪へられないほどでした。陰気な家、暗い濕つた空氣、二人の病少女は、さながら墓場の人のやうに思はれました。

その後、輝子さんは五週間の苦しみを嘗めて、はかなくも永い眠りに就きました、お母様が亡くなつたのと同じ病氣で。

きみ子さんは、輝子さんの遺骸に取り絶つて、泣いて泣き通しました。けれども、もとより病弱なきみ子さんの眼からは、もう涙が絞れなくなつたのか、まるで氣抜けのしたやうに、泣き腫らした眼で、あたりをキョロキョロと見廻はしてゐるばかり。

私は、きみ子さんの窶れた姿を見て、何と慰むべきかを知りませんでし



た、日ごろ、病身なきみ子さんが生き残つて、その看病者であつた姉の輝子さんが、斯ういふ不意なことにならうとは、誰しも想ひがけがなかつたでせう。いや、現に亡くなつた輝子さん自身も、今はのちまで、こんなこととは思はなかつたでせう。それにしても、あの弱々しいきみ子さんが、杖と頼む姉を失つて、この後、どんな悲惨な運命にめぐり遇ふことであらう？ 私には亡くなつた人よりも、生きてゐるきみ子さんを哀れませぬには居られません。

### 六一 不安の五箇年

身體の弱いものは不幸です。どこが痛むといふことはなくても、氣分の進まない時には、何をすることも厭になります。況して、ながい病後の疲れ

に、好きな學校へも行かれず、濕つた家庭の人となつて、わびしい月日を送る少女があつたら、どんなに哀れなことでせう。

不幸はこればかりに止まらず、その家庭に、なほ別な病人があつて、病後のやつれた少女が、その看護をしなければならぬといふやうでしたら、いかばかり心細いことでせう？ 而も斯ういふ不幸な少女が、世の中に實際あるのですから、氣の毒ではありませんか。私はさき頃、或る少女から、次のやうな手紙を受取りました、名前は明かす譯には行きませぬけれど、文章は元のまゝにして皆様の御覽に入れます。

いつぞやも申し上げました通り、私は永い間のわづらひで、學校も止してしまひ、家事もまだ碌には手傳へないので御座いますが、仕事の閑々に書物を読んだり文章を作つたりして、これでも獨學で一生懸命に勉強して





居ります。

この頃では、もうよほど快い方で、朝は五時に起きて、勝手元の御用もして居ります。けれども私は時とすると、また學校へ上りたくて堪らないと思ふことがございます。哀れな少女の心の中を、どうぞお察し下さいまし。

私には兄弟が多くて、兄もあり、弟も妹もございませうけれども、女では私が一番姉でございませう。二人の弟と妹は、皆まだ小學校に通つて居ります。父は五年この方の永い病氣で寝てゐるのでございませう。五年も寝たざりで自由がきかないのですから、さぞく自烈たいことだらうと、私はどうかして慰めて上げたいと思ひながら、なか／＼お氣に召すやうに出来ないのが悲しうございます。

父が病み初めましたのは、五年前の花散る頃でございました。家中のもの



のは皆心配して、あの名高い〇〇醫學博士に診察していただきました。その時博士は「一箇年の命は請合ふが、その後は何とも解らぬ。併しこの病氣は直りませんよ」と、母を蔭へ招いてお話しになりましたさうです。

それから後、母と子供とが、夜の眼もねず看病した甲斐があつて、三年後の今日まで、父の命を取りとめました。けれども、明日をも知れない父を持つ身、母も私も、ろく／＼心は休まりませぬ。私はどうかして父の病氣が直るやうにと、毎晩、眠る前に床の中で祈ります。他人さまの眼からは、直る見込みがないものと思はれても、子としての慾目でせうか、私には父が全快するとしか思へませぬ。

私の父はどうしても直らないでせうか？ 『父はもう直らないでせうか』と、私は優しくして下さるお方に、きつと斯うお尋ね致します。すると、氣休めかも知れませんが、





『御安心なさい！ きつと直りますよ。』と言つて下さいませ。あ、本當に父は直るのでございませうか。たとへ直らなくても、今のまゝで、私たちが大きくなつて、お父様に安心おさせ申すことが出来るまで、あゝして居らして下さつたらと、こんな果敢ないことを、せめてもの願ひとして居ます。

私は幼い時から、わがまゝに育てられて、その御恩はまだ萬分の一もお返しいたしません。もし父の病氣が直りましたら、心一ぱい世話をしあげたいと思ひますが、これは空想に終るでせうか。『安心せよ』といふ言葉、私は耳に刻みたくてなりません。(中略)

私の兄弟七人のうち、一人位は父の名を繼いで父に安心させることが出来るだらうと、たいそればかりを楽しみにいたして居ります。けれど、あゝけれど、それまで父の命が保つてゐるでございませうか、日々不安な眼

を以て、病床にある父の顔を見て居ります。

まあ、お忙しくてゐらつしやいませうのに、くだらぬ愚痴ばかり長々と申し上げて、さぞ御迷惑でございませう、女の弱いくり言とお笑ひ下さいませんやうに、まだ申し上げたいことも山々でございませうが、これで失禮いたします。

### 六二 お葬式の行列

練のやうな小雨がシト／＼と降つて、空は薄暗い。

亡き人に乗せた柩は、しめやかな町を徐ろに昇がれて行きます。柩の前後に幾十臺となく續く幌車、憂ひを帯びた人々の顔は、黒い幌の蔭になつて、一しほ陰氣に見えます。私は亡き人のことを思ひ浮べつゝ、その俥に



交つて靈柩の後に従ひました。

過ぎ行く町々では、多くの人々が『それ、お葬式が通る！』と互ひに知らせ合ひつゝ、何か面白いものでも見るやうに、兩側に佇んで悲しい行列を眺めて居ります。

『善いお葬式だねえ。』

『随分な俵ぢやアないか。』

『幾臺あるだらう？』

『ひい、ふう、みい、よう、……』

と、前列から俵を敷へて居る子供もありません。やがて柩が、とある橋を渡つて道を右に曲りますと、またしてもその町の子供たちが、面白さうに兩側に列んで見て居ります。

『やア、お葬式だお葬式だ。』

『大きいお葬式だぜ、どこの人が死んだんだらう。』

『こりやア屹度、男の人のお葬式なんだよ。』

『もう老人かも知れないわねえ。』

『そら、そこへ位牌を持った子供が来るぢやないか。あの子のお父さんが亡くなつたんだよ。』

と、口々に噂し合ひながら、無遠慮な見物人が、行列の俵を覗くやうにして居ります。

高く掲げた白い提燈、十幾對の麗はしい生花、それについで緋の衣、

金襴の袈裟美しいお坊さんの俵が幾臺か連つて行く。その後には、亡き人

の忘れがたみ、十二になつた兄と九歳の弟とが、何れも黒のツメ襟洋服を

着て、喪章をつけた學生帽を冠り、兄は位牌を、弟は香爐を捧げて行く姿、

甲斐々々しい中にも憂ひの色があつて、見るものに哀感を起させます。



と、行く手の或る家の戸口に、顔色の青い、しよんぼりとした少女が佇んで、ちつとお葬式の過ぎ行くのを見て居りました。今し、位牌と香爐とを持つた幼い兄弟が、その少女の前にさしかつたと見る間に、少女の兩眼からは、玉のやうな涙がハラ／＼と流れ出ました。而して、ついで行く靈柩に對して、少女は殊勝にも兩掌を合せて伏し拜みました。

奇特な少女！ 見物の群集が面白さうに笑ひさゝめく中に、この少女ばかりはたゞ一人、亡き人の忘れがたみの、いたいけな様を見て、われ知らず悲しい思ひに満たされたのでせう。位牌を持つて行く子供は素より憐れですが、それを見て涙を流す少女も、また悲しい運命に囚はれてゐるのでありますまいか。

亡き父の柩を送る可憐の兄弟と、その痛ましい有様を見て、涙にむせぶ少女と、私はこの二つを見比べて、今更に新しい涙を催しました。想ふ

にその少女も、近き過去に父か母かを失うて、この可憐の兄弟と同じやうに位牌を持つた経験があるのではありますまいか。

六三 遅 刻

甲「今日は珍らしいことがあつたでせう、あなた氣がついて。」

乙「なアに？ 私知らないわ。」

甲「これちやア明日は、雨が降るかも知れないと思つてるのよ私。」

乙「何がそんなに珍らしいの。」

甲「そら、鈴子さんが……。」

乙「鈴子さんが如何かなすつたの。」

甲「ほんとにあなたは無頓着なのねえ、今朝に限つて、いつも遅い鈴子さ。」



んが、遅刻ちこくなさらなかつたぢやありませんか。』

乙『あら、その事ことなの。』

甲『え、さうよ、珍めづらしいぢやありませんか。』

乙『さう言いやアさうねえ。あの方かた、どうしてあんなに毎日まいにち遅刻ちこくなさるんでせう。』

甲『もうあゝ毎日まいにちぢやア、慣なれッこになつてゐらつしやるんでせう。』

乙『だから、平氣へいきなものね、遅刻ちこくしても。』

甲『まさか、さうでもないんでせう。』

丙『そんな悪いわること言いふものぢやアなくつてよ、お氣きの毒どくだわ。』

甲『なぜ？』

丙『だつて鈴子すずこさんは、お母様かあさまが御病氣ごびやうきなのよ。』

乙『あら、さう……。』

丙『だから、鈴子すずこさんはお忙いそしいんですわ、毎朝まいあさお家うちのことをなさるんですもの。』

甲『まあ！ ぢやアお氣きの毒どくだわねえ。』

乙『ほんとに同情どうじやうするわ。』

### 六四 か げ 口

花子『そらネ、私わたしが言いつた通りとほりでせう、今度こんどの宿題しゅくだいも静子しづこさんが一いっ等とうだつたでせう。』

久子『だから、私わたしもう張合はりあひがないわ。』

花子『いくら勉強べんきやうしたつて駄目だめよ。静子しづこさんはあれなんですもの。』

久子『そりやアさうよ、静子しづこさんは前まへから先生せんせいの御最負ごひいきなんですもの。』





花子『ほんとに憎らしいわ、いつでも静子さんに定まつてるんですもの。』  
久子『私、静子さん大嫌ひ！』

美知子『お止しなさいよ、そんな悪口いふのは。』

花子『美知子さんは静子さんと仲が好いんですもの、ねえ久子さん。』

久子『よくお出来になる方同志は、違つたものだわねえ。』

美知子『あら、さうぢやアないわ、私だつて何も静子さんの最負をする譯

ぢやないけれど、静子さんがお氣の毒だと思ふのよ。一等になつたつて、

静子さんが悪いんぢやなくて、不公平なことをなさる先生が悪いんですわ。

だから静子さんを悪く言ふのは可哀さうよ。』

久子『それもさうだわねえ。』

花子『ほんとにさうねえ、静子さんは知らずに居らつしやるんだから。』

美知子『だから私、静子さんが皆に悪く言はれて、お氣の毒だと思ふの。』

久子『いやな先生！』

花子『だけど、私たちだつて、よく出来るやうになれば、やつぱり先生は

可愛がつて下さるわねえ。』

美知子『え、だから勉強しませうね。』

## 六五 嫌ひになつた

A子『私、愛子さんは随分だと思ふわ。』

B子『どうしたの貴女、あなたは愛子さんが大好きだつたぢやありません

か。』

A子『え、これまでは大好きだつたけれど、もう大嫌ひになつたの。』

B子『をかしいのねえ、あなたが愛子さんと喧嘩をなさるやうぢやア、隅





田川が逆さに流れるかも知れないわ。」

A子『まあひどい！ 何とでも仰つしやい。』

B子『あなたほんとに怒ってるのねえ、一體どうしたといふの？』

A子『だつてネ、今朝みんなで陣取りをして遊ぼうと言つたんですよ、その時、私頭痛がしてゐたんでせう、だからどうしようかと思つて、はじめ一緒にならなかつたの。するとネ、愛子さんが何だか怖い顔して、さア〜早くしませう、ぐず〜してゐるものは、寄せませんよつて仰つしやるでせう、私よつほど何か言はうかと思つたけれど、我慢して黙つてゐたの、而したら愛子さんは、もう厭な人を無理に誘はなくつても、これだけで早くしませうつて、さつさと彼方へ行つておしまひになるんですもの。』

B子『それで貴女は怒つてらつしやるの。』

A子『さうよ、随分ちやありませんか。私、愛子さんはもつと優しい方だ

とばかり思つてゐたわ。ほんとに怖い方よ、私もう大嫌ひになつたの。』

B子『あなたの好き嫌ひは當てにならないのねえ、そんなこと位で嫌はれちやア、愛子さんも割に合はないと仰つしやることよ。』

## 六六 好 き な 名

かつ子『私ほんとに厭な名だから困るのよ。』

福子『どうして？ かつ子さんて好い名ぢやありませんか、詩的な名だわ。』

かつ子『あら厭だ。家の弟なんか私のことを數の子數の子つて言ふのよ、

お正月の景物だつて。私、名を取りかへたいわ。』

福子『あなたがそんなこと仰つしやるのなら、私なんか如何したら好いでせう。』



かつ子『あなたは好いちやありませんか、福々しさうで可愛いわ。』

福子『あんなこと……私、福子つて名は嫌ひよ。』

かつ子『ぢやあ、どんな名が好いの？』

福子『さうねえ、私美の字のつく名が好き。』

かつ子『美しい子？』

福子『猫の名のやうぢやありませんか、美しい子つて言はなくなつて、美咲子、美枝子、美貴子、美知子、美代子、美根子、美穂子……それから美津子、みんな好い名だと思ふわ。』

かつ子『ほんとに美の字のつくのは、美しさうに聞えるのね。……ぢやあ私の好きな名を言つて見せませうか。』

福子『え、あなたのはハイカラな名でせう。』

かつ子『あら、さうでもないことよ。えと郁子、すみ子、百合子、愛子、

雅子……私こんな名が好いと思ふの。』

福子『好いわねえ、美しい名の方は、ほんとに美しさうで慕はしいわ。』

かつ子『全くよ。でも、あの高子さんね、あの方はお丈が低いけれど高子

さんよ。』

福子『優子さんだつて、あんまり優しくはないやうね。』

かつ子『笑子さんも……あんまり笑顔でもないのね、いつでも恐い顔。』

福子『さうよ、だから私なんかも、そんなに悲觀しなくつても好いわ。』

かつ子『名よりも實つて言ふから、美しい行ひをするやうに心がけませうね。』

六七 靴の紐



正月二日の早朝、例の通り一時間の散歩に出て、芝公園を一まはりして歸る途中のことでした。

町には、軒毎に門松が嚴めしう立てられてありますし、早起きの家ではもう國旗をかゝげて、店前にはそれ／＼初賣りの品をならべかけてゐるといふ有様、さすがに初春の町は景氣が好い。

森元町まで参りますと、向ふから十歳位な男の子と七八歳の女の子とが、兄妹なのでせう、お正月だけに美しく着かざり、互ひに楽しさうに手を引き合つて來かゝりました。すると、女の子は靴の紐が解けたので、困つたらしい顔をして立ちとまりました。

「兄さん、どうしませう。」

「紐が解けたんだね。」

「え、私困つちやつたわ。」

「好いよ、僕が結んでやるから。」  
と、金ボタンの洋服を着た愛らしい男の子が、兄さんぶつて少女の靴の紐を結んでやりました。

門松に國旗ひらめくお正月の朝、紋つきの着物に袴をはいて、よそ行き姿をした美しい少女の靴の紐を、殊勝にも小さな兄さんが結んでやるといふのは、何たる麗はしい圖だらうと、私はそれを寫生する筆のないのを恨みました。

「學校へ行つてゐる時分に、もつとよく圖書を習つておけばよかつたのに。」

今さら後悔しても及びません。圖書に限らず、どんな學問技藝でも、覚ええられる時に覚えておかないと、きつと後で悔むことが起ります。はじめは、こんなことを習つて何の役に立つのだらう、と思ふやうなことも、



習つてさへおけば、決して損にはならない、いつかその効があらはれて、身を助ける時があります。

### 六八 新らしい服装

西洋料理を出すのに、日本風のお椀に盛つたら、どうでせう？ その味に變りはないかも知れませんが、喰べにくくて、一種の妙な氣もちがするだらうと思はれます。

これと反對に、日本料理のうま煮や椀ものを、平たい西洋皿に入れたら、どんなに不調和で風味を缺くことでせう？

世に不調和なこと、言へば、よく洋服に足駄穿きを例に挙げますが、これはたゞに足駄ばかりではなく、洋服に番傘も不調和ですし、洋服を着て

疊の上に坐るのも苦しいものです。

着物や食物や住居に、斯ういふ不調和なことが澤山あるのは、眼に見え、眼に見えない心の中にも、随分不調和なことが多いのです。

この頃は、少女がハイカラになつたとか、出過ぎものになつたとか言つて、一部の人は大層心配して居るやうですが、私が見るところでは、決してさうではあるまいと思はれます。ハイカラだとか、活々した態度とかは、少女に限つたことではなく、一般の風潮がさうなつて來たのです。世間の様子が殆んど皆昔と變つて來たのに、少女だけ何時までも封建時代のまゝで居れといふのは、ちと無理な註文ではありますまいか。

殊に、少女の服装が昔と違つて來たのを悪く言ふのは、よほど可笑しいと思ひます。すでに内部の思想が進んで居るのに、外側の着物ばかりを昔





風にしておかうと望んでも、それは出来にくいことでもあり、また却つて不調和なことで、ちやうど西洋料理をお椀に盛つたやうなものでせう。思想がハイカラになれば、外觀もそれに伴なつて進むのは當然のことです。もし着物や行ひを昔風にとおふのなら、先づ思想をそれにふさはしうせねばなりません。女學校では、生徒の着物やリボンのことが、しばしば問題に上るやうですが、斯ういふことは生徒自身もよく考へて見て、内にかくれた心と、外に現はれる行ひや服装とが、なるべく美しい調和を保つやうにせねばなりません。

聖書に「新らしき布を古き衣に縫ひつくるものあらじ。もし然せば、その新たに補へるもの舊きを綻ばして、却つて悪くなるべし。また新らしき酒を舊き革囊に入るゝものあらじ。もし然せば、新らしき酒はその囊を破り裂きて、酒漏れ出で、革囊もまた壞るべし。新らしき酒は、新らしき革



囊に盛るべきなり。」とあるのは、深く味はふべき言葉だと思ひます。

新らしい食物は新らしい器に入れたい。新らしい品物は新らしい所に置きたい。従つてまた、新らしい思想を新らしい衣で包んだからとて、誰かこれを咎めませうぞ。

但し、誤解のないやうに申しておきますが、新らしい服装とはその形のこと、品質の善悪を言ふものではありません。質は木綿でも、メリンスでも、その形は新らしくすることが出来ますし、またいかに絹の立派な着物でも、いたづらに舊い型に囚はれるやうでは、私のいはゆる新らしい服装ではありません。

外形と品質とは、おのづから別問題です。



六九 ハイカラとおしゃれ

「おの方は随分ハイカラね。」

「頭髪の結ひやうつたら如何でせう。」

「それに、あの肩掛を御覧なさい、大變なハイカラぢやありませんか。」

斯ういふ批評を聞くことがしばしばあります。ハイカラとは、頭髪の結

ひ方やリボンや肩掛のことなのでせうか、それとも氣取つた姿のことをい

ふのでせうか。

一體、ハイカラといふ言葉は種々の意味に用ひられて、時と場合によつては、善くも悪くも解釋されるやうです。が、概して申しますと、人の目につきやすい、新しい變つた風采をすることのやうに見做されて居ります。従つてハイカラと言へば、頭髪を新流行の結ひ方にするとか、大き



な目だつたりボンをつけるとか、身體の様子を華やかにするとか、すべて外見に關したことが多い。

併し、人間には身體の外に心があるのですから、ハイカラにもやはり心のハイカラがなければなりません。即ち、進んだ思想をもつて、物事を面

倒がらずにハキ／＼とやつてしまふ、而して後はサツパリとして居るとい

ふやうなのが、心のハイカラではあるまいかと思はれます。

外見のハイカラはあまり感心しませんけれども、心のハイカラは決して

悪いことではないと思ひます。これまでのやうな古い思想や、引き込み思

案では、忙がしい世の中に適しないのですから、或る程度までは、寧ろハ

イカラにならなければなりません。

この意味で、心がハイカラになれば、自ら外見もハイカラになる譯です。

併し、ハイカラとはおしやれのことゝ誤解してはなりません。おしゃれは、





何時いかなる場合にも、これを慎しまなければなりません、確乎した心から出たハイカラならば、決してこれを悪くいふには當らない。進んでハイカラであつて欲しいと思ひます。

### 七〇 やさしい花少女

少女が人生の花と歌はれるからには、私は諸嬢に、どこまでも花のやさしみを持つて頂きたいと思ひます。

雪を肩して清香を放つ梅の花、旭に匂ふ櫻ばな、誇り顔に咲く牡丹の花、路傍につくしましう笑む堇の花——花にもさまざまの種類があります。併し、どの花を見ても、何處となく一種のやさしみが現はれてゐるではありませんか。

これと同じく、人の氣質も種々様々に異つて居りますから、快活なものあれば、おとなしいものもあり、また雄々しい氣だてのものもあります。けれども、それはたゞ外部にあらはれた所だけで、心の奥には、どんな少女でも、必ず一點のやさしい情がひそんで居ります。少女が、人の世の花と稱へられるのは、全くこのやさしさがあからでせうと思はれます。もし、このやさしい情がなかつたら、たとひ色美しう咲き誇る装ひを施しても、人に愛せられることは出来ずまい。

### 七一 花の品位

牡丹の花は、濃艶で華美ですけれど、何となく雅致に乏しく、品位も缺けてゐるやうに思はれます。而して一たび雨にあひますと、大きな花びら



はホロ／＼と地に散る。華やかに咲いて、はかなく散りゆく牡丹、美しい裡にも一種の悲哀が含まれてゐます。

艶なる花を好まないものは、春なほ淺き庭に、水仙を御覽なさい、梅を御覽なさい。霜を冴し雪を戴きながら、つゝましやかに咲いて、えならぬ芳香を放つではありませんか。花は小さくても浮いた色はなく、艶なる風情はなくても、いかにも上品な趣きがあります。

花に譬へられる少女は、牡丹となつて一時の榮華に誇るべきでせうか、しほらしい水仙と咲いて品位を保つべきでせうか、將たまた梅の意地を備へて清節を完うすべきでせうか。

### 七二 盲従と明従

昔から、従順なのは女子の美德の一ツとされて居ります。

父母の命に従ひ、長上を敬ひ、師の仰せを守り、何事もハイ／＼とおとなしく従つて行くのは、まことに優しい素直な心に違ひありません。

併し、いくら間違つたことを言はれても、だまつてそれに従つたり、厭なことを無理に強ひられても、やむを得ずそれに従つて行くのは、決して好ましいことではありませんまい。何でも彼でも、御無理御尤もで、無意味に服従するのは、眞の従順ではなくて、盲従といふべきものだらうと思ひます。

これと反對に、服従はするけれども、解らないことは十分に問ひ質す、而して心に承知した上で、氣もちよく従つて行く。もしまた無理なことならば、それに對する自分の考へを穩やかに述べて、互ひに打ち解けた後に快く服従する。これが眞の従順ではあるまいかと思ひます。前の無理に





従つて行くのを盲従といふならば、これは明従とでも言ふべきでせう。  
盲従は無教育なものゝすることです。苟くも教育を受けたものは、眞の  
従順、即ち明従でなければなりません。

### 七三 梅 の 蕾

歳の暮に買つて来た鉢植ゑの白梅が、翌くる一月の末に、やう／＼綻び  
そめました。

この梅を早く咲かせるについては、随分苦心しました。お正月の飾りに  
とて、福壽草の小鉢とゝも買つて来た時には、まだ蕾が固くて、いつ笑  
み初めるとしも見えませんでした。それでも、さゝやかな枝一ぱいに蕾を  
持つて居るものですから、どうかして早く咲かせたいと、晝の間は日當り



のよい縁側に持ち出し、朝夕は火鉢の傍において暖めました。わけても庭  
に霜柱の立つ朝、雪降りつもる夕など、この梅のために、どれだけ心を痛  
めたか知れませんでした。

暖かい室内において、やゝ蕾が白味を含むやうになつたかと思ふと、一  
夜、寒ささびしくて、折角の心づくしが見えなくなつたこともありました。  
同じ時に求めた福壽草は、はや二ツ三ツ可愛らしい花を開いたのに、なせ  
梅は咲かないのだらうかと、待ち遠しく思つたこともありました。

けれども、暖かい日が二三日つゝいたお蔭で、さしもにかたかつた梅の  
蕾も、見る／＼ふくらみそめて、馥郁たる清香を洩らした時の嬉しさ！  
私は何だか自分の育てた子供が大きくなつたのを見るやうな気がしまし  
た。

室内を暖めたり、火鉢の側においたりして、さまざまに手をつくしても、



容易に蕾を破らなかつた白梅が、自然の暖かい日光を受けて嬉しげに綻び初める！ これを見ても、自然の力の偉いなることゝ、日の光りの有り難さを感じずには居られません。日蔭の花は咲くのが遅いけれども、自然の恵みを受けて、暖かな日光に浴しさへすれば、咲くべき時に美しい花を開く、人の運命もまたこれと同じなのではありませんまいか。

七四 雛まつり

三月になると、皆様は楽しいことが多いでせう。先づ第一には三日の雛まつり！

お座敷の床の間には、むらさき縮緬の幔幕高う引きしぼつて、絳毛氈の五段にかざられた雛人形の姿美しう。ゆるう流れる雪洞の灯に瑤瑤ゆら

めいて、蒔繪のお重に桃の花の二ひら三ひらこぼれ散るなど、繪にも描きたい眺めではありませんか。

さてその前には、菱餅、お白酒、豆焙り、榮螺、かすくの品を供へて、姉も妹も、お母様もお祖母様も、今宵ばかりは雛の客となつて、お白酒の酔ひにほんのりと頬を染める樂しさ、誰の顔にも夢みるやうな微笑みがあるはれて、おのづから春の心も忍ばれます。

斯ういふ美しい、みやびやかな行事は、わが國獨得の風習として、いつまでも少女の胸に残しておきたいと思ひます。皆さまも、年に一度の雛まつりには、あらん限りのお雛様を飾つて、一家のものは言ふまでもないこと、親しいお友だちをも招いて、美しい團欒をつくられるやうに望みます。



七五 卒業式と新入學

三月のたのしさは、雛祭りについで學校の卒業式。花もそろそろ咲かうといふ時に、めでたく學びの業を終へて、校門を出る樂しさは、たとへるものもない位でせう。併し、ながい間教へを受けた師の君にわかれ、ともに學び勵んだ友垣に別れを告げる時の心もちは、どんなでせう？ 卒業證書を握つて、いそぐと廊下を駆けまはる樂しさと、『お手紙だけは頂戴な』と言ひながら、さびしう校門を出る時の悲しさと——いつまでも忘れられない記念の一日。嬉しい涙を拭く紅いハンケチと、悲しい涙を拭く白いハンケチとを、兩の袂に用意しておかねばなりませんまい。

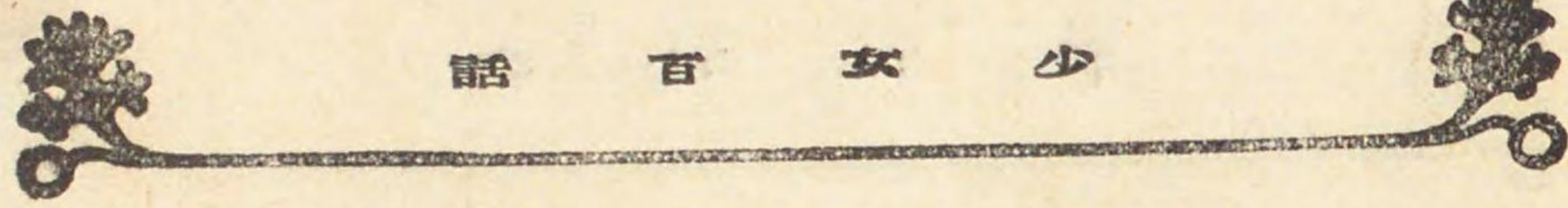
卒業式がすむと、すぐに四月の新入學、花わらひ鳥歌ふ春に、はじめて新らしい學校の門をくぐる心は、どんなに希望に満たされることとせう。



△卒業の日▽







新入學は楽しいものです、小さな胸に誇りと嬉しさとの高波が亂れ打つ時です。併し、僅かに門をくいつたばかりでは、まだ安心することは出来ません、いや、これまでよりも更に一層のかたい覺悟をもつて、今後の勉強を誓はなければならぬのです。一學年の成績の良不良は、全く新入學のときに定まるのですから、遠い將來に望みをかけて、怠らず勉強勵まなければなるまいと思ひます。

### 七六 柳の根ざし

やさしう萌え出た柳の若芽を見ますと、『青柳の深き根ざしのありてこそ姿を風の吹くに任せめ』といふ古歌が思ひ出されます。

汀に生ひ立つて、絲のやうな枝を垂れた柳は、風のまに／＼打ち靡さま





すけれども、決してその優しい姿を失ひません、いや、風に吹かれながらも、その枝が折れるといふ例はありません。これは、姿こそ優しけれ、眼に見えぬ深い根をしつかり土に埋めて居るからです。やさしい少女も、またこの柳のやうでなければなるまいと思はれます。

智識を廣め、技藝を習ひますのは、ちやうど枝葉を繁らせて、美しい花を咲かせるやうなものです。枝を擴げ花を咲かせるには、先づその深い根ざしを養つておかねばなりません。然らば根とは何でせう？ それは言ふまでもなく心の修養です。

確かな心！ しつかりした精神を養ふのが、教育の一番主なことだらうと、私は思ひます。皆さまは、姿は風の吹くに任せても、先づ深い根ざしを養ふやうに心がけて下さい。學問や技藝には秀でましても、心がぐらついて居るやうでは、何の役にも立ちません。美しい少女の操といふのも、

つまり心の深い根ざしに外ならぬのであります。

### 七七 温順と因循

A「あの方はおとなしいのね。」

B「あの方の笑つた顔は、滅多に見られないのね。」

A「碌にお話もなさらないんですもの。笑つた顔なんか見られるもんですか。」

B「ほんとにさうよ、あんなでも困るわねえ。」

A「何かといふと、いつまでもモヂ／＼してらつしやるのよ。急ぎの時間か、ほんとにぢれつたいわ。私、急性だから。」

B「この前のクラス會の時にも、随分困つたわねえ、いくら言つても養え



さらないんですもの。』

A『そんなこと言つちやア悪いけれど、あゝ引つ込んで居るのも變ね。』

B『どうせすることなら、さつさへ行つてしまつたら宜からうと思ふけれど。』

A『なか／＼さうは行かないんでせう。口を利くだけでも、容易なことぢやアないんですもの。』

B『それで居て、心は随分ひねくれてることよ。』

A『あんなにおとなしいと、自然とあゝいふ風にひねくれて来るんでせう。』

B『さうでせうか知ら……私、あんなのは本當におとなしいんぢやないと思ふことよ。』

A『ぢやア、どういふんでせう。』

B『おとなしいのを通り越して、因循なんだわ。』

A『因循？ いやアねえ。でもそれが適評かも知れないわね。』

B『私たちは因循にはなりたくないわ。』

A『そりやアもう、貴女や私は因循どころかお轉婆の隊長なんですもの。』

オホ、、、。』

B『ホ、、、でも因循家よりは、お轉婆の方がまだ好いかも知れないわ。』

A『ぢやアやつぱりお轉婆しませうかね。』

B『えゝ、お轉婆はしても、心の中は温順にして居れば、いゝぢやありませんか。』

A『そりやアさうよ。だから本當の温顔な性質になりたいわねえ。』

B『さうすりやア、お轉婆もだん／＼に直つて来るでせうよ。』



### 七八 玉を包むに

貴い玉を包むには、金襴か錦かの袱紗を用ひたいものです。瓦を包むには、つゝれの巾で澤山でせう。

併し、金襴や錦の袱紗ばかりがあつても、玉がなければ何とも致し方がありません。瓦を包むべく、錦はあまりに美し過ぎます。

また美々しい袱紗は持たなくても、貴い玉さへあれば、一時の間に合せに、これをつゝれの巾で包んでおいても差支ありません。

つまり、先づ第一に貴い玉を手に入れなければならぬのです。金襴や錦の袱紗は、あとからでも求められます。

然るに世間には、袱紗ばかりを美々しうかざり立て、その中には瓦にも劣つた泥を入れて喜んでゐるものがないとも限りません、あさましいで

はありませんか。

貴い玉とは心の光りです。金襴の袱紗とは立派な着物です。

立派な着物を着たいと思へば、先づ心の玉を磨かねばなりません。つゝれの衣を纏ふのが厭ならば、瓦を捨て、ダイヤの玉を手に入れるのが宜しい。

玉が出来たら、次には錦か金襴の袱紗をお捜しなさい。しつかりした品性が養はれた上は、外見を美しくしたからとて、必ずしも答めるには及ばなからうと思ひます。

### 七九 愛の泉

或る書物を讀んで、「愛は愛を生ず」といふ一句があつたのを、手帳の中



に記しておきました。

愛を以て向へば、敵でもこれに抵抗することをためらひます。貧しいあばら屋にも、愛の光りさへ輝けば、いつも春のやうな楽しさが充ち満ちます。而もその愛は、決して自分一人にとまらず、次へ次へと新しい愛を生じて、遂に一面の愛の海となるのであります。

譬へて申しますと、愛は清い泉のやうなもの、これを汲んで味はへば、疲れた身體にも新しい力が湧き立ちますし、荒れた心にも温かい希望が起つて來ます。

愛は少女の生命で、少女は愛の權化と言つてもよいでせう。少女のやさしい心と、その美しい行ひとは、世のあらゆるものを感化する力が含まれて居ります。従つてまた、愛を生ずる少女の心は、とこしなへに清く澄んでゐなければなりません。

ハ ○ リ ボ ン

もし少女の頭髮から、悉くリボンを取り去つてしまつたら、世の中はどんなに寂しくなるだらうかと、或る人が申しました。

美しい少女だとか、きれいな少女だとか、よく人が申しますが、一體どこが美しいのでせう。……顔でせうか、着物でせうか、頭でせうか、袴でせうか？……顔も美しく、姿も愛らしい、紫の袴にボタンがけの靴もよく似合ひます。けれども、一目見たところで、一番美しく見えるのは、漆のやうに黒い髪の上に、ヒラ／＼と揺れるリボンです。

道路をあるいてゐても、學校の運動場を覗きましても、電車に乗りましても、赤、青、白、紫紺、樺などの美しいリボンが、一番さきに目に



ついで、「そこに愛らしい少女が居る」といふことが、際立つて解ります。ですから、人間の中の花が少女であるならば、そのリボンは、ちやうど花のやうなものだと言つても宜いでせう。

着物や帯の色合ひをよくするのは、もとより大切なことに相違ありませんが、それよりもリボンの色彩の方が、なほ一層大切な位です。なせかと申しますと、帯や着物は、遠くからはハッキリと解りませんが、また割合に大きい色どりが、入りませになつてゐますから、互ひに助け合つて、少々配合のわるい所でも、さほど目立たずに済むことがあります。ところが、リボンになりますと、何しろ小さいものですから、その全體が一時にあらはれますし、また頭髮の黒い所につけるのですから、非常によく目立ちます。殊に、多くの少女が寄り合つた時などには、着物や羽織は、よほど強い色でない目に着きませんが、リボンばかりは、頭の上でヒラ／＼

して居るのですから、すぐにわかります。小さな一ツのリボンでも、決して輕蔑する譯には参りません。

洋服を着る男の人は、ネクタイを非常に氣にかけます。洋服の地質や柄は、大抵みな似寄つたものなので、さほど見わけがつきませんが、ネクタイは小さいものでありながら、胸の眞正面を飾るものですから、一番さきに目につきます。少女のリボンや半襟も、ちやうど洋服のネクタイのやうなものです。もし婦人のヴェールを男の帽子とすれば、リボンは慥かにネクタイです。襟巻や帽子は、さう數多く取りかへる譯には行きませんが、リボンやネクタイは、たび／＼取り換へることが出来ますから、なほさら注意を引くことが多いのです。

リボンには、その色彩から言ひましても、またその形から見ましても、なかく種類が澤山あります。先づ大きく申しますと、無地のリボン、縞



リボン、木理、縹子地、びろうど、綾地リボンなど、さまざまありまして、その色合ひには、數限りもなく多くありますが、この中でも、上品に見えるのと、下品に見えるのとがありますから、よほど注意して選ばなければなりません。むやみに色彩の強いものをつけますと、却つて顔色が黒く見えるやうなことがあります。淡紅色、藤色、樺色などは、誰にでもよく似合ひますが、赤だの青だのは、極小さい子供には宜しいけれども、もう大きくなつた少女には、似合はないやうです。

白のリボンは、高尚なものですけれども、どうも寂しくつて冬は寒さうです。殊に、髪の毛の赤い人や薄い人には、白は似合ひません。紺や茶色は、シミですけれども、上品で、何となく奥ゆかしく、どんな人にでもよく似合ふやうです。

また、少女會とか、學校の運動會とか、多くの少女が集まる場所へ行く

には、なるべく強い色のリボンをつけるのが宜しい。而して、外の少女が皆、無地のリボンをつけて居る時に、一人か二人、あらい縹のリボンをつけたのは、非常に際立つて、美しく見えるものです。けれども、あんまり大柄の縹リボンは、見ざめがしますから、始終用ひるには不適當です。時々取りかへるやうにせねばなりません。

それから、髪の毛の結び方とリボンとも、随分關係のあるものです。お下げやマガレートの時には、よほど華美なりボンをつけても宜しいが、もう束髪に結ふやうになりますと、さうは参りません。マガレートやローマは、概して巾の廣いリボンをつけた方が似合はしいやうです。また、上下とも對のリボンをかけるのもあり、色を違へるものもありますが、それは好き好きでせう。

西洋の婦人は、ボンネットを戴いてゐますから、頭が賑やかで美しく見



えますけれども、日本の少女は、まだあまり帽子を冠らず、また和服に帽子は何となく不釣合ですから、たいリボンばかりが、頭の飾りとなつて居るのです。殊に近頃は、日本髪がだんく廢つて、大抵みなお下げや束髪にするやうになりましたから、なほさらリボンの必要を感じます。斯ういふ風に、リボンが盛んに用ひられるやうになりましたからには、どんなリボンがよく似合ふか、また場合々々によつて、どんなリボンを用ひたら宜いか、といふやうなことを、自分で研究して見るのも面白いでせう。甲の少女に似合ふリボンでも、これを乙の少女がかけると、可笑しく見えることもありますから、何でも自分の顔や頭髪の結び方と相談して、少しでも色取りのよいものを用ひるやうにお心掛けなさい。

## 八一 自然の美

朝 旭を受けて爛漫と野に咲ける百花をながめ、夕、西の空を仰いで、金色に彩られた雲のゆきかひを見れば、誰しも我をわすれて、『あゝ美しい!』と叫ばずに居られないでせう。

野に咲く花、谷間にせゝらぐ清き流れ、緑滴る青葉の蔭、さては吹く風涼しき濱邊に、亭々たる磯馴松が白砂と相映じた光景、すべてこれ等は、飾らず偽はらず、たい自然のままなのにも拘はらず、繪にも筆にも記しがたいほど、美しい景色をあらはし、麗はしい姿をつくつて、人のながめるのを待つて居るかのやうです。けれども、いかに自然の景色が美しければとて、これを見るものゝ心に、美の思想がなければ、河の感じも起りません。田子の浦や須磨の浦曲で、毎日網を曳いて居る漁夫たちは、波おだや





かな海の面をながめても、遠く近く點々たる眞帆片帆の行き交ふさまを見ても、別に美しいとも面白いとも思はないのでせう。美しい自然の中に包まれながら、その美を味はふことの出来ないものは、實に憐れむべきではありませんか。さればわれ等は、見るほどのものを美しくと思ひ、麗はしいと感ずる心を養ふやうに、絶えず心がけねばならぬと思ひます。

少女と言へば、すぐに美しいといふことを聯想する位で、少女と美とは、決して離れることが出来ないのです。少女の紅の頬、みどりの髪、活々とした姿などは、もとより美しいには相違ありませんが、單にそればかりではなく、その心も美しくなければなりません。いや、美を喜ぶ思想を持つてゐなければならぬのです。

美の思想を養ふには、どうすればよいかと申しますと、先づ自然に接して、その美を見るのが一番近道であります。



少女諸子は、繪を見て美しいと思はれるでせう。詩や歌を讀んで、その辭句や思想を美しくと感ずるでせう。美妙的な音樂を聞けば、言ふに言はれぬよい氣持ちになるでせう。繪畫、詩歌、音樂などは、みな美を目的としたものでありますが、併しそれを作るには、やはり自然を手本として、その美を寫したものが多いのです。江の島の景色や富士の白雪の美しさは、いかに巧妙な畫家や詩人の筆でも、とても及ばない所があるではありませんか。また、松風が自然に調べる音樂は、ピアノや琴の音よりも、却つていみじく聞えることがあるではありませんか。これを見ましても、いかに自然の美の尙ふべきか、解るでせう。

自然の美は、たゞに山水の景色に限られたものではありません。野に轉る雲雀の聲も美しいし、空にかゝやく星の光りも、また自然をかざる一大美觀です。殊に、『空には星、地には花、人の世には少女』と、昔から優し



く美しいもの、隨一に數へられる花のながめは、また格別です。『ソロモンの榮華のきはみも、野に咲ける一本の百合に及ばず』といふことがありますが、全くその通りで、いかに鉅萬の富を以てしても、花の自然の美しさを購ふことは出来ません。人の智識が如何に進歩しても、野山に自から咲くやうな花を作つて、妍艶たる美と馥郁たる香氣とを保たしめることは、決して出来ません。

造花は美しいものです。自然の花よりも、却つて色あざやかに、美々しう拵へられることがあります。けれども、造花には香氣もなく生氣もありません、自然の花のやうな、ゆかしい風情が缺けて居ります。

世の中にありとあらゆる花の數々、何れもやさしく美しく、これを見れば、おのづから氣ものびやかになり、たとひ腹の立つて居る時でも、これを見れば、何だか心が和らいで参ります。それ故に、花を愛するものは、その心がやさしくて情ぶかい、これに反して、花を喜ばないもの、心は、冷やかで慘酷だと言はれる位です。

人の家を訪問した時に、床の間に美しい花が、あつさりと活けてありますと、何だかその部屋にのどかな氣が溢れてゐるやうで、住む人の心もゆかしく忍ばれます。また、寄宿舎の窓から、愛らしい草花の植木鉢などが

見えますと、いかにもその室内が楽しさうで、そこに起き臥しする女の姿までが、まだ見ぬながらも、美しいやうに思はれます。机の上の小さい鉢では、薔薇の花が薫を放つて居るし、床の花瓶には、け高い百合が活けてあるといふやうでしたら、どんなにその部屋がなつかしいでせう。

花壇につくつた花や、鉢に植ゑた草花でさへ、それほど美しいのですから、況してこれが自然のまゝに、廣い野山に咲き亂れ、青葉、若葉に交つて居ましたら、なほ一層美しいこととせう。燃えるやうな紅の花と、目



もさめるばかりの緑の若葉とが、互に入り亂れてその美を競ひ、傍にはチヨロ／＼と音立て、流れる谿川がある。而して百千の鳥は、楽しさうに轉りながら、その上を飛び廻る——この美しい景色、のどかな様を、想像するさへ愉快ではありませんか。而もそんな景色は、大いなる自然の中に、澤山あるのです。

春は花、夏は水のほとり、秋は月、冬は雪と、自然のながめは、四季折折に移り變つて、而もその時々美しいのです。貝原益軒といふ名高い學者は、この四時折々の美しい景色をながめるのは、何よりも楽しみなことだと言つて、

『この樂しみ、朝夕つねに目の前にみち／＼て餘りあり、これを樂しめる人は、即ち山水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず、たからもて買ふにあらざれば、一錢も費さず、心にまかせて、ほしいまゝに取

りて用ふれども、盡きず。つねに我がものとして領すれども、人いさはず。いかなとなれば、山水風月の佳景は、もとより定まれる主なければなり。』

と述べました。また鴨長明といふ人は、『方丈記』といふ書物の中に、日野山の奥に假りの宿を定めた時の有様や、自然のながめの美しさを記して、『勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。』と申しました。げにや自然の佳景は、いつまで眺めようとも、どんな貧しいものが眺めようとも、敢て差支はないのですから、これを見て樂しむほど氣持ちのよいことはありませんまい。

自然の美觀に親しみますと、精神が高尙優美になつて、言ひ知れぬ樂しみを享けるばかりではなく、また無限の教訓を悟ることが出来ます。野に生ふる一本の花でも、決してあだに咲いたのではありません。神の深き御



旨を受けて、咲くべき時、咲くべき所に、何等かの使命を帯びて咲いたのです。その優しい花の心を知ることが出来れば、やがて神の御心を探ることさへも出来ると言はれます。

英國の有名なる詩人テニソン卿は、

『壁の裂け目に咲く花よ、汝をそこより取り出で、

根をも花をも掌にのせつ。

汝は小さき花なれど、汝の何たるを知り得なば、

神と人とを知りぬべし。』

と歌ひました。實に深い意味が含まれて居るではありませんか。

土の中に棲む賤しげな蟲も、やはり世に生きながらへるだけの生命があつて、而して人には知られないでも、自分のなすべき仕事をして居るのです。また、それ等の動物は、おの／＼團體を作つたり、利益の交換をなし

たりして、互に關係を保つて居るのですが、その生活の有様などを研究しますと、自然のまゝに行はれる幾多の教訓を知ることが出来ます。

その外、春、火冬の序を違へずに、めぐりめぐる自然のはたらき、水の流れ、雲のゆきかひにも、無言の裡に、深い／＼教訓が含まれて居るではありませんか。

あゝ偉いなる自然！ 野にも山にも、海にも空にも、到る處に美と教訓とが充ち満ちて居る、而もまた自然の中にとありとあらゆる動植礦物は、みな自然の力を享けて世に存在し、自然の美の一部分を成して居るのです。この美を愛し、この教訓を悟る心は、おのづから我れ等の胸に宿つて居るのです。人の世の美をあつめた少女諸子よ、朝に夕に自然を愛で、ますます美しい思想を養ふやうに心がけたいではありませんか。



八二庭の草花

十歩の小庭も、春は百花咲きみだれ、夏は青葉若葉の蔭なつかしう、四季折々の眺めを添へます。朝夕、庭に下り立つて、手植の花をいぢり、若木に水を與へなどすれば、身も心もすが／＼しうなつて、狭い庭ながらも、げに清い美しい樂園のやうに思はれます。

夏の草花のかす／＼、赤き、白き、とり交せて咲いてゐますが、多くは縁日で買つて來たものばかりで、中には名も知らぬ西洋花もあります。名は解らずとも、實は結ばずとも、私はたゞ、眺め美しく、姿やさしいのを、見て居るだけが楽しみなのです。

庭の草花の中で、私の一番好きなのは、薔薇です。紅のは活々として美しく、乳色のは上品で氣高く、いづれも少女の心に似て居るやうに思はれ

ます。

片隅のお不動様の前に、妍艶と咲き誇つてゐた芍薬、雨に打たれて散りながら、まだ三ツ四ツ小さなのを咲き残した心根、何だか憐れな氣持ちがします。牡丹を男とすれば、芍薬は女と言つても宜しいでせう。あでやかな中に、どことなく優しい色が含まれて、あまり驕つたさまのないのが、殊さら嬉しいではありませんか。

玩具のやうなお池のほとりに、愛らしう咲き續けた燕子花も、やゝ時候おくれとなつて、あちらに一つ、こちらに一つと、寂しげに残つて居るの

は、さすがに初夏のなつかしさを忍べとの心でせうか。  
燕子花と花菖蒲とは、よく似た花ですが、併し幾分か違つた所があります。花菖蒲の葉には、中央に太い脈があつて、劍脊状をしてゐますが、燕子花の葉には、そんなものはありません。それからまた、花菖蒲は凜々し



い男子の性を帯びて居るやうに思はれますが、燕子花は紫の色もゆかしう、女子の性にふさはしい趣があります。その花の匂やかなために、『匂ふ』といふことにかゝる枕詞にも使はれる位かきつばたは杜若とも燕子花とも紫羅蘭とも書きますが、私は『燕子花』と書くのが、花の心に適つたやうで、譯もなく好きなのです。

右の方の花壇には、真紅の罌粟が、驕りに驕つて咲いて居ます。白や紋りも交つて、氣もはれくとする美観です。併し私は、どうもこの花を好みません。咲いたかと思つるのは僅か一日二日で、やがて花弁は一枚々々、ボタ／＼と剥げるやうに落ち行くさまが、いかにも哀れを催さしめます。一時は富貴歡樂に酔つたものが、あとかたもなく衰へ行くやうで、何だか嫌なのです。これも、見る人の心ごころによることとせう。

蜀葵は、スツクとばかりに、丈高くのび上つて、その莖の兩側に順序よ

く、目のさめるやうな赤い花を着けてゐます。譬へば、えび茶の袴を胸高にはいて、女ながらも勇ましく、といふやうな風情があります。去年、奈美子さんから頂いた天竺牡丹は、冬の間霜にあてぬやうにと圍つておいた甲斐があつて、早くから芽を吹き、青々と葉を繁らせて、小枝小枝に蕾さへ持つて來ました。やがて、濃艶な花を開いて、庭の女皇と仰

がれることとせう。その名も愛らしい雛菊が、庭の片隅につまじう、白楊の青葉を見上げながら咲いて居る嬉しさ、小さな花にも、無量の情が宿つて居るやうに思はれます。西洋では、殊の外この花を愛で、昔から名高い詩に詠まれたことが多きさうです。

鳳仙花も亦美しい花です。これは、またの名を『つまくれなる』と言ふのださうですが、花の形が禽の翔るのに似て居るから、鳳仙と名づけました





とか。人によつては、花に雅致がないから、賤しくていけないと申します  
 が、私はそのスラリとした、而して氣取らない風情を喜びます。またこの  
 草花は、別に育てやうとせずとも、自然に勢よく生ひ立ち、殊にどんな所  
 でも構はず生へるのが、まことに快活で平民的でよいと思ひます。  
 人の中にも、いやに氣取つたり、上品ぶつたりするものがありますが、  
 私は何事もハキ／＼と、自分の思ふ通りに言つたり行つたりして、少しも  
 體裁ぶらないのがよいと思ひます。斯ういふ譯で私は、鳳仙花が富貴を羨  
 まず、貧賤を厭はずして、すなほに咲き誇るのを愛するのです。  
 紫陽花は、花のまはりが賑かで、而もあつさりとした、目のさめるやう  
 な花です。併しその色が移り變るのは、何となく輕薄なやうにも思はれま  
 す。水色のやゝ紫を帯びた色、私はあれが大好きです。  
 お祖母さんが植ゑて下さつた鶏頭は、すん／＼延びて來ました。お祖母



さんは大得意です。今でこそ、庭に草花が多いから、鶏頭などは目にも立  
 たないが、やがて秋風が吹いて、庭の景色がさびれ行く時分には、あの葉  
 が美しう色づいて來ると言つて居られます。  
 牽牛花は未だ咲きませんが、蔓ばかりは長う延びて垣根をまとい、お隣  
 りの庭先まで覗き込む位になりました。この花が咲く朝を、私は今か々々  
 と待つて居るのです。疾く起きて庭に出で、朝の清い冷たい空気を、心ゆ  
 くばかり吸ひながら、垣根に二ツ三ツ、色あざやかに咲き初めた牽牛花を  
 見れば、それこそ眠いのも何もスツカリ忘れて、今さらのやうに眼が覺め  
 るではありませんか。私は夏の景色の中では、朝が一番好き！ いや、垣  
 根に咲いた牽牛花を見る朝が好きなのです。早く咲け牽牛花！  
 牽牛花とゝもに、夏の朝の涼しさを増すものは、紅黄色に露を宿した  
 凌霄花です。高く／＼籬にからんで蔓をのばし、繁み合うた葉の間から、





五ツに裂けた花冠を飾る、見るも涼しさうで、實にえも言はれぬ風情があります。これもまた、待たるゝ花の一ツに數へませう。

待たるゝ花と言へば、私は何故だか小さい時から、秋海棠が好きなのです。お庭の隅の葉蘭の隣りに、しのびやかに芽を出して来た秋海棠の五六株、莖も葉も愛らしく優しい姿です。あの弱々しさうな莖が、珊瑚のやうに紅いのも、何となく慕はしいではありませんか。やがて、少女のやさしさにも譬へられる優美な淡紅色の花を開くこととせう。

この外、名の解らぬ西洋花が、花壇に一ぱい咲いて居ります。紅いのは紅いので美しく、紫のは紫でゆかしく、白はまた交り氣がなくて上品に、いづれも飽かぬながめの装ひです。けれども、日本花と西洋花とを比べますと、西洋花の方はコツテリとして、色が飽くまでも濃く、葉や莖の勢も強いやうです。日本花の優美にして雅致のある上へ、更に西洋花の勢ひの

強さを加へたら、どんなに麗はしいこととせう。——(夏のわが庭の記)

### 八三 旅行と運動と

英國で發行される雑誌を見ますと、女子の戶外運動や旅行に關する寫真が、なかく澤山入れてあります。

イギリスの國民は、男も女も旅行好き、運動好きであるといふことを、前から聞いて居ります。運動と旅行との盛んな國で發行される雑誌には、自然とそれに關する記事が多くなるのでせう。

試みに、ロンドン畫報でも披いて御覽なさい、夏のことなら、花も恥ぢらうやうな美しい少女が、骨格逞しい馬に鞭つて、ひろくとした野邊に乗り出して居る寫真もあれば、學生らしい五六人の少女が、青葉涼しい木





蔭にテントを張つて、趣味の多い田園生活をはじめて居る寫眞もある。さ  
 うかと思へばまた青々とした芝生で、ゴルフの遊びに耽つて居る凜々しい  
 少女もある。緩やかな河の流れにボートを浮べて、權持つ手も甲斐々々し  
 う漕ぎ寄せて居る少女もあるといふ有様。その寫眞を見たゞけでも、いか  
 に英國女子の運動が盛んであるか、察せられます。  
 翻つて日本はどうでせう？ 悲しいかな、まだ運動も旅行もあまり盛ん  
 ではありません。夏休み中の旅行と言つても、僅かに富士登山か、海水浴  
 に出かける位なもの。とても英國少女の活潑なのに比べられなからうと思  
 ひます。  
 日本では、旅行だの轉地だのと言へば、何だか贅澤にすることのやうに  
 誤解されて居ります。いや、日本人の旅行や轉地は、實際贅澤なのかも知  
 れません。その證據には、汽車に乗るのに美々しいよそ行きの着物を着飾

つたり、海水浴をするのに外見を張つて、立派な宿屋に泊つたりするもの  
 が、なか／＼多いではありませんか。それでは、費用が多くなるばかり  
 で、身體のためには、却つて害になるかも知れません。旅行や運動は、虚  
 榮のためでも贅澤のためでもなく、精神を爽快にし、身體を健やかにする  
 のが、第一の目的なのです。なるべく簡単に質素に、而して面倒から  
 ずに出かけるやうにせねばなりません。  
 外國人の眞似をするのは、私は嫌ひです。殊に日本の女子には、昔から  
 の美しい風習があるのですから、むやみに外國の風俗をまねるには及びま  
 せん。けれども、運動とか讀書とかいふことは、どうしても外國の女子の  
 方が進んで居るやうに思はれます。斯ういふ優れた點は、或る程度まで眞  
 似をして、日本の女子も外國人にまけない位、健全な體格と廣い智識とを  
 養はねばなりません。



### 八四 快活と粗暴

無邪氣で快活な少女は愛らしいものです。快活だとか陰鬱だとかいふのは、もとより性質にもよりますが、併し心の持ちやうによつて、よほどそれを修養することが出来ます。

快活な少女に接しますと、よく晴れた日、うららかな光りに浴するやうな氣もちが致します。さみだれの降りくらす日が厭ならば、誰しも常に快活な心をもつて居りたいものです。

併し、思つたことは何でも構はず言つてしまひ、したいことは勝手氣儘に行ふといふのが、快活なのではありません。さういふ無責任なことをするのは、快活ではなくて粗暴なのです。のびやかな心もちから、自然に現

### 八五 故郷を愛せよ

はれる快活は望ましいけれども、わざとらしい粗暴は、深くこれを慎まなければなりません。

快活と粗暴とは、どこか似て居る點があるだけ、それだけよく注意して、人の誹りを受けないやうにすることが肝要であります。

『故郷を愛せよ。』

『どうすれば故郷を愛することになるか。』

この問題には一寸答へにくい。故郷は人形や猫の子のやうなものではありませんから、これを愛すると言つても、膝に抱き上げたり撫でたりすることは出来ません。それなら、どうして愛すればよいのでせう？



常に父母の膝下にはかり居るものは、その愛になれて、父母の有りがたさが解りません。たま／＼よその家に行つて一週間も泊るとか、寄宿舎生活でもすれば、はじめて父母のなつかしさが味ははれますし、またこれまで氣のつかなかつた高恩が、しみ／＼と感ぜられます。

これと同じやうに、郷里を愛するといふ心も、他郷に出てから、一層強く深くなるのではありますまいか。日ごろ見なれた山と水とは、別になつかしいとも美しいとも思ひませんが、しばらくそこを離れてゐて、今度歸つて見ますと、小川のさ／＼やきにも、峰の雲にも、一種の昔なつかしい感じが起つて來ます。そのなつかしい感じ、慕はしい思ひ出が、強ければ強いほど、故郷も愛する心も、またそれだけ深いのだと言はなければなりません。

学校のお休みがつ／＼く時には、皆様も懐かしい故郷へ歸られることでせ

う。故郷のなつかしさと我が家の楽しさが、一番深く味ははれるのは、歸省の時より外にあるまいと思ひます。

學校のある土地に生れて、常に温かな家庭に育てられ、まだ一度も寄宿舎生活をしたことのないものは、もとより幸福です。併しまた、ながい間他郷の人となつて、夏のお休みに歸省するものも、やはり幸福な境遇なのです。もし歸るに故郷なく、住むに平和な家庭がなかつたら、その人の悲しさはどんなでせう。それを思ふと、皆様はなつかしい郷土の楽しいわが家へ歸ることの出来るのを、感謝しなければなりません。

あゝ、楽しいわが家、なつかしい郷土！ 家を思ひ郷土と親しむのは、取りもなほさず國を愛するの心です。私は、夏休み冬休み毎に、特に皆さまに愛郷心、愛國心といふことを考へて頂きたいと思ひます。



八六 歸省だより

夏休みに歸省中の一少女から、慕はしい故郷のさまを描いた手紙をもらひました。その一節に――

『幾多の學生より、希望と喜悅とで迎へられた夏休み！……温かな父母の御手に抱かれた弱い少女は、何ごとにもまれ、だゝ勿體なさに、嬉しさに、われ知らず涙がこぼれるのでございます。今日は叔母の許に、明日は海水浴にと、たゞもう夢のやうな楽しい日を送つてゐる中に、ながいお休みもすぐと経つてしまふのでございませう。なつかしい故里の山、おもひ出の多い山川を後に、再び學び舎の人となるのかと思ひますと、弱い心には何故か悲しくて寂しくて……』

いつもさうなのでございますよ、歸省いたしました當分なんか、皆様



△歸省だより▽



の活氣くわつきがなくなつて、寮りやうの空氣くうきは何なんだかシンミリとしてゐます。私わたしどもでさへこんなでございますもの、二年ねんのお小ちひさい方かたなんかは、ほんとにお可か哀あいさうなほど、始終しじうしく泣ないてゐらつしやいます。中なかには何なんともない方かたもありますけれど、九月ぐわつの學期がくきのはじめには、どうも一體たいに寂まじしい氣きがしますので、ホームシックで御歸宅遊ごきたくあそばす方かたすらございますのよ。ほんとに樂たのしい故郷こきやうを後あとにする時ときの心こころもち、何なんとも申まをされませんわ。』寄宿舎生活きしやくしんせいをしたことのあるものは、夏休なつやすみの後のちに、皆みなこの手紙てがみと同じやうな樂たのしい感かんじ、悲かなしい感かんじを繰くり返かへさすには居ゐられますまい。この感かんじがあつてこそ、年ねんに幾度いくどかの歸省きせいが、この上うへもない樂たのしいものとなりま  
すし、また新學期しんがくきのはじめに勉強べんきやうする心こころも起おこつて來くるのです。  
平和へいわの家郷かきやうには永遠えいえんの幸さちあれ！ 新あたらしい學期がくきには無限むげんの望のぞみあれかし。





八七 早起

夏休み中の心得については、皆様は毎年學校で委しくお聞きになること  
 でせう。身體の健康をはかること、家事の手傳ひをすること、復習を怠ら  
 ぬやうにすること、教科書以外の読みものに注意すること、自然界の事物  
 に親しむこと、これ等は今さら更めて申すまでもありますまい。  
 たゞ私が皆さまにお薦めしたいのは、誰にでも出来る『早起』といふこ  
 とです。

早起きは家の榮える基とか申しますが、たとひ家は榮えなくても、早起  
 きは身體のためにも精神のためにも、たしかによい効果があるやうです。  
 朝早く起きますと、第一に清い空気を呼吸して、爽やかな景色を見るこ  
 とが出来ますから、おのづから精神が快活になります。従つて、家事を  
 手傳ふにも書物を読むにも、いき／＼した心もちで、少しも苦痛を感じま  
 せん。斯うして早くから快く働きますと、夕方には身も心もぐつたりと  
 疲れて、夜更かしなどは、したくても出来なくなります。夜は早く安らか  
 な眠りに就き、朝は夙に起きさへすれば、心身は常に健やかです。どうぞ  
 皆様は、學校がお休みだからと言つて怠らずに、朝は早くから起き出で、  
 よく働いて下さい。——身體の健康のために、精神を爽快に保つために。

八八 眞の美人

「雨をも厭はず、風にも恐れず」といふのは、たゞに強健なる男子のみに  
 用ふべき言葉ではありませんまい。少女もまたよく雨に耐へ、風を忍ぶだけ





の強い身體を養はねばなるまいと思ひます。  
折角、以前から行かうと楽しみにしてゐた所でも、その日になつて雨が降ると、何となく出にくいものです。

『こんなに降るから、今日は止さうか知ら？』

と、つい弱い心が起らないでもありません。併し、思ひ切つて出てしまひますと、もうその氣になりますから、雨も風もさほど恐るゝに足りません。ただ出かけようか止さうかと、家に居て心配する間が一番面倒なのです。

雨が降つたからとて、張子のお人形ではあるまいし、破れも壊れもするものではありません。野に立てられた案山子でない限りは、ちつとやそつとの風で吹きまくられるやうなこともありますまい。なせ人は風雨に對して、さう意氣地がないのでせう。

少女はかよいいものとは言ひながら、風雨や寒暑に負けるやうでは仕方



がありません。今後の少女は、精神も強く身體も健やかに、思ひ立つたことは百難を冒しても行ひ遂げる、行ける所までは必ず行くやうにならなければなりません。

健やかな身體、いき／＼した氣もち、光澤のある皮膚の色、ゆたかな肉づき、活潑なる舉動——眞の美人となるには、どうしても身體の丈夫なのが第一だらうと思ひます。

### 八九 上品とおすまし

上品な少女となるには、どうしたら宜いでせう。

おつとりと落ちついて、物柔らかで、口の利き方がおだやかで、起居振舞ひがしとやかで、而して何處となく神々しい！ 斯う並べ立てますと、



一ツ／＼誰にでも出来さうですが、最後の『何處となく神々しい』といふのが、容易に出来ません。これは手を動かすのでもなく、身體にシナをつくるのでもなく、顔を美しくするのもなく、ただ心の持ち方一ツなのです。ところが、上品にと言へば、いやにおすましをすることだと思つて、言ひたいことも言はずに、ツンと高く構へ込んで、見るから無愛想な様子をして居るものがあります。これは考へ違ひも甚だしいので、眞に上品な少女は、決して氣取りも濟ましもするものではありません。おすましは醜いけれども、上品なのは愛らしくて慕はしい。その愛らしくて上品な少女となるには、先づ第一に心を穏やかにせねばならないのであります。

## 九〇 運動會

秋は運動の季節です。学校には、楽しい運動會が催されることとせう。よく學び、よく遊ぶのは、誠に樂しみなものです。運動會の時には皆様の心は、この楽しい感情が高波を打つて居るでせうと、羨ましく思ふことがあります。

すでに遊ぶ以上は、どこまでも快活に、暢びやかに遊ばなければなりません。氣を腐らせて運動會に出たとて、何が樂しいでせう。やましい心を抱いて競技に加はつたとて、何の誇りがあるでせう。清い心、すがすがしい感じをもつて、快活に振舞うてこそ、はじめて運動會の樂しさが味はれるのです。

運動會について、特に皆様に心がけて頂きたいのは、團體のためを計り、その名譽を傷つけないやうにするといふことです。

この頃の学校の運動會は、體操でも遊戯でも、一人々々とするのよりも



多人数の組み合わせでするのが多くなりました。即ち、旗送り競争にしろ、球蹴りにしろ、ダンスにしろ、皆多くの人と組み合わせるのです。それ故、その中に一人の劣つたものがあつても、直ちに組全體に影響を及ぼします。また組の中に、一人でも不愉快な感じをもつたものがありますと、何となく全體の調子が揃はないやうになります。従つて、多數のためには自分を犠牲にしなければならぬ。團體のためには力の限りを盡くさなければならぬ、といふことになります。

これは運動會に限らず、學校でも家庭でも社會でも、多くの人々と共に交はり、共に遊び、共に事をする場合には、同じ心がけが必要なのです。一級の中に、一人でも悪い生徒があると、その級全體の名譽にかゝはりますし、一人の善い生徒があれば、その學校全體の名譽が上つて來ます。われは、自分のために善い行ひをすると同時に、學校のため社會のため、

即ち公共團體のためにも、その名を輝かせるやうな行ひを努めなければなりません。

### 九一 監獄のやうな學校

嘗て、或る田舎町の女學校で運動會が行はれたとき、その町の中學校の生徒や青年男子は、『女學校より二町以内の所へ近寄るべからず』といふ注意を受けたさうです。

それから次に、同じ町の中學校で運動會が行はれた時には、女學校の生徒に向つて、『中學校より二町以内の所へ近寄るべからず』といふ訓示が發せられた、といふことを聞きました。

私はそれを聞いて、いくら田舎の學校でも、そんな馬鹿らしいことはあ



るまい、きつと嘘だらうと思ひました。併し悲しいことには、それが事實であつたのです。

学校の傍へ近寄つてはならないのだ、寄宿舎から外へ無断で出てはならないのだと、むやみに生徒をおさへつける学校は、ちやうど監獄のやうに窮屈なものだ、と思ひます。

楽しい学校を監獄のやうにしたのは、誰の罪なのでせう。生徒にもその罪の半分があるのではありますまいか。

## 九二 智識よりも婦徳

最近数年の間に、女子の教育が一般に普及したことは、實に驚くばかりであります。斯くも盛んになつて來た女子の教育を、どうか悪い方に傾か

せないやうに、ますます善良なる道を取つて進ませたいのは、誰しも等しく祈るところであります。この事については、学校の先生よりも、家庭の父母よりも、先づ第一に生徒自身が堅實なる覺悟をもつて、われと我が心を勵まさなければなるまいと思ひます。

何のために学校へ行くのか、何のために書物を読み理科を學ぶのか。――それは言ふまでもなく、やさしい婦徳をそなへ、正しい心をもつた立派な人間になるためです。たゞ數學を習つた、地理を學んだ、國語を覺えたといふだけでは、本當の教育を受けたものとは言はれません。學科よりも心、智識よりも婦徳です。正しい道を踏んで、よく努めよく働き、而してやさしい婦徳を守る少女ならば、たとひ高尚な學科は修めずとも、將來立派な婦人となることが出来るだらうと、私は信じて居ります。

学校に行つて、國語や地理や歴史を學びさへすれば、それでよいと思つ



て居るのは、大間違ひです。學科の外に、正しい心と善良なる婦徳とを養ふのを忘れてはなりません。國語を習ふのは、讀書の力をつけるためです。地理や歴史を學ぶのは、日本國民としての美しい婦徳を養ふためです。むつかしい數學を覺えるのは、物事を確かに判断する力を發達させるためです。斯ういふ目的を忘れて、たゞ學校に居る時だけ試験勉強のやうに學科を詰め込んだところで、さしたる効果はありません。

どうぞ諸嬢は、物知りになるよりも、よい心の少女になつて下さい。常に正しい道を進んで、天地に恥ぢないといふ確乎とした心を養つて下さい。而してまた、日本婦人としての優しい美しい徳操を守つて下さい。諸嬢がこの心がけを忘れないやうにして下さりさへすれば、日本の女子教育は自然に進んで行くのです。この覺悟があつてこそ、はじめて學校教育を受けた甲斐もあらはれて來るのであります。

### 九三 柿の實

『今朝もまたこんなに柿が落ちて居る。』

と、私は柿の木の下にたゞずんで獨りごちました。それは日光さやかな秋の朝のこと。

狭い庭一ぱいに枝葉を擡げた柿の木、今年は殊に多く實りましたので、秋になつたら、自分も喰べよう、お遊びに來る多くの少女たちをも喜ばせようと思つて、まだ青酸漿ほどの小さい時分から、楽しみにして居りました。

何時かT子さんが遊びに來て、

『まあ、随分澤山實つてゐるのねえ、これ甘いんですか。ちやア私、秋に



なつたら、毎日喰べに来ますわ、早く喰べられるやうになると好いわ。』  
と、待ち兼ねてゐた位です。

ところが、その柿の實がだん／＼大きくなるにつれて、どうしたものか、此の枝にも彼の枝にも蟲がついて、まだ熟する時分ではないのに、皮の赤く色づいたのが、青い葉蔭にチラ／＼見えるやうになりました。而して風もないのにポタリポタリと落ちる。少し風のある晩などは、まだ青いのまが無残にも振り落されるといふ有様。遂には、はじめの三分の一もない位に減りました。その代りに、あとまで残つたのは、皆十分によく實つて、いかにも甘さうに熟しました。

落ちた柿は惜しい。けれども蟲もつかず風にも落されずに、力一ぱい熟するまで残つた柿を見ますと、何とはなしに一種の喜ばしい感じが浮んで來ます。私は、人の一生も、またこの柿の實のやうなものではあるまいか

と思ふのです。

はじめ小學校の一年に入學した時には、同じクラスのお友だちが、何百人といふほど多かつた、然るに二年、三年、四年と進むに従つて、半途で退學するものも出来るし、また不幸にして死ぬものもある。而して芽出たく卒業するものは、最初の半分にも足らぬほどになります。

更に高等女學校程度になりますと、家庭の事情や、本人の望みによつて、一年々々と同級生が少なくなる、中にはまた思ひもかけぬ心の蟲がついて、淺ましい性質に墮落してしまふものもあります。斯くして最後まで残つたものは、真によい少女——精神も身體も健やかな少女ばかりとなるのです。蟲がついて、早くから赤くなつて落ちる柿は惜しい。また青い中に、風のために吹き落される柿は哀れです。世の中には、斯ういふ柿のやうな不運な少女も、少なくはなからうと思ひます。



私は皆様に、最後まで残つて、熟する時期を待つて十分に熟するといふ健全なる少女になつて頂きたいと思ひます。

九四 なつかしき故郷

七年ぶりになつかしい郷里に歸りました。

私の郷里は、姫路から四里ばかり北に當る山の中で、まことに寂しい不便な所。汽車に乗るのにも、播但線の溝口といふ停車場まで一里ばかりも歩かなければなりません。そんな不便な片田舎ですから、三年や五年の間歸らなかつたからとて、別に驚くやうな變化もなく、山は依然として高く、水はとこしなへに清く流れ、曲りくねつた田舎道も、藁葺きの家も、くづれかゝつた水車小屋も、すべて舊のまゝです。

『ゆく川のながれは絶えずして、而ももとの水にあらず、よどみに浮ぶたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。』

と、鴨長明が方丈記に書いたやうに、藁屋の中に住んでゐる人には、亡くなつたものもあるでせうし、新しく産れたものも多いのでせう。けれども、静かな田園の間をあるいて、山と川とを眺めた眼には、七年の昔も今も變りはなく、たいなつかしいとのみ感ぜられるのでした。

子供の時分に鮒を釣つた小川の淀み、学校の歸りによく花を摘んだ山の尾、人を見ると恐ろしく吠える大きな西洋犬のゐた家など、今もなほ舊の通りなので、そゝろに過ぎし昔を偲びました。(明治四十三年)



九五 撫子とコスモス

郷里へ歸つたのは、ちやうど秋の半ばごろのこととて、見渡すかぎり田の稲は黄色に熟して、豆の葉ももう大方は黄ばんでゐました。木犀の香も、なつかしう鼻をつきました。家々の庭には、紅白のコスモスが美しく咲いてゐました。途中で遇つた一少女は、コスモスの一輪を簪の代りに挿してゐましたが、私と行き違ひさま、怪訝らしう振り返つて眺めました。私も一寸振り返つて、少女よりもその頭に挿されたコスモスの花に眼をとめました。

交通の不便な、人情の質朴な、而して何事も昔風を守る田舎のことゝて、私の子供の時分には、コスモスの花を頭にかざすやうな少女は、殆んどないと言つてもよい位でした。いや、頭にかざすどころか、第一コスモスが

どんな花やら、その名を聞いたものさへありませんでした。

然るに、いつの間に斯うも栽培されるやうになつたのか、今は家といふ家には、悉くその庭にコスモスが植ゑられてあります。七年前までは、大人でさへも知らなかつた花の名を、今は三歳の童子でも知つて居るといふ有様。こればかりは變化の乏しい郷里に、非常な色彩を添へたものと言はなければなりません。

七年ぶりで歸つた故郷の秋は、紅白のコスモスで美しく飾られてゐました。昔は大和撫子を日本少女の表彰として、その可憐な、しほらしいさまを愛でたものですが、今は撫子よりもコスモスの方が、少女の花としてふさはしいのではないかと、私はその時感じました。

しとやかな大和撫子がよいか、のびやかなコスモスの方がよいか、それは一概にどちらとも申されません。併し、交通不便な山の奥までも、全國



至らぬ隅なくコスモスが咲きはこるやうになつたのを見ますと、私は日本の少女の姿や心にも、或は昔と違つた新しい表彰が出来たのではないかと、ひそかに考へて居ります。

撫子としてつゝましやかに咲くべきか、將たコスモスのやうに垣根を越えて高く聳え咲くべきか、これは實に女子修養の一問題です、皆様も時勢の進みゆくとともに、まづめにこの問題を考へて戴きたいと思ひます。

### 九六 少女の世界

もし世の中に、女子が一人もなくて、男子ばかり住んでゐるとしたら如何でせう？ またこれと反對に、男子がなくて、女子ばかりの世の中となつたら、どんなに心細いこととせう？ 男子と女子とは、一ツのものゝ半

分づゝのやうなもので、必ず共に存し、共に力をあはせて働き、共に歩調を揃へて進んで行かなければならないのです。

ところが日本では、これまで男子ばかりが先に進んで、女子はやゝ後へ取り残されてゐたやうな傾きがあります。早い話が、男子のためには多くの學校も設けられ、あらゆる社會上の便宜もはかられてゐるのに、女子の學校と言へば、最近十年ばかり前までは、まだ數へるほどしかありませんでした。従つて、社會に於ける女子の勢力も、極めて微弱なものでした。

併し、これでは一國の文化が開けよう筈はありません。男子と女子と共に足なみを揃へて進まなければならぬのに、一方が後れてゐるやうなことは、その國の文明は片輪と言はなければなりません。そこで我が國でも、十數年來、大いに女子教育の普及を謀つて、今では至るところに



女學校も設けられますし、女子専門の書物や雑誌も多く発行されるやうになりました。この勢ひで進んで行つたら、今後数年の間には、女子も男子と同等までとは言はれないにしても、あまり後れを取らないやうになることとせう。

神武このかた二千五百七十餘年、わが國の歴史は多くの才媛や賢母によつて飾られて居ります。けれども、史上にあらはれた所で、男子と女子とどちらに偉人が多かつたかと言へば、申すまでもなく男子——いや歴史の重なる舞臺は、殆んど男子ばかりであつたと言つてもよい位とせう。

もとより女子は、内に居て家を治めるのが本務なのですから、表面に立つて花々しい事蹟を残さなかつたのは當然のことです。併し、今後は戦争ばかりで國の富強が加はる譯でもありませんから、女子の働くべき平和の舞臺は、ますます廣くなることと思はれます。

瑞典の閨秀エレン・ケイ女史は、『二十世紀は子供の世界である』と申しました。私は更に一步を進めて、『二十世紀は少女の世界である』と言ひたい。なせかと申しますと、國の文明の根源は、半ば以上少女の力によつてつくられるからです。

少女の力が、國の文明の源になると言へば、あまりに大袈裟に聞えるかも知れませんが、併し靜かに考へ及ぼして見ますと、これは全くの事實です。即ち、少女は成長の後、一家の主婦となり、子供の母となるのですから、少女時代の知識や徳操や體力は、やがて第二の國民に影響するではありませんか。今でこそかよわき少女であれ、五年十年の後には、その少女の力で家をも富ませ、子供をも善良に教育することが出来るのですから、つまり一國の文明を進め、その富強を増す譯になるのであります。

あゝ少女の力！ 二十世紀は力ある少女の世界とならなければなりません。



ん。従つて少女には大なる覺悟が要ります。——それは自信と忍耐と勇氣とを以て、徳を修め、知を磨き、體力を練るために、あくまで撓まず勤め勵まなければならぬ、といふことであります。

### 九七 蒔かれた種子

コスモスが咲いて、柿の實が熟して、瑠璃色の空爽やかな秋になりますと、學生は運動會と讀書とに心身を養ひ、農夫は收穫に倉を満たすのに忙しい。

この秋に、ゆたかな收穫を見るのは、六七ヶ月も前に種子を蒔いて、夏の暑い盛りの間、よく雑草を抜き肥料を與へて育てたからです。世に、『蒔かぬ種子は生へぬ』といふ諺があります、更にこれを裏から言ひ換へ

ますと、『蒔いた種子は生へる』とも言ひ得るだらうと思ひます。

蒔いた種子なら生へる。たとひその場ですぐに結果は見られないにしても、適當な肥料と日光とがあれば、いつしか芽を出し、葉を生じ、美しい花を咲かせて、遂には立派な實を結びます。

これと同じやうに、皆様も今、目に見えない種子を蒔いておかねばなりません。皆様の柔らかな心は恰も苗代のやうなもの、その心に一つ一つの行ひとなつて、美しい花と現はれ、やがて氣高い品性といふ實を結ぶやうになるのです。皆様は、学校の教科書や、課外に讀む雑誌や書物から、知らず識らずに種子を蒔かれてゐるのです。善い種子が心の苗代に植ゑつけられるれば、善い花が咲き善い實を結びますけれども、もし誤まつて悪い種子が蒔かれたのを知らずに居ると、後には恐るべき結果となつて現はれます。



私は皆様にお薦め申します、「柔らかな心の苗代に、出来るだけ多くの善い種子をお蒔きなさい」と。その種子は、今すぐに芽を出さなくても宜しい、一たび蒔かれた種子は、いつしか花を開き實を結びますから。

### 九八 事物の観察

秋！——庭の面に散りしく木の葉の色にも、高く澄み渡つた空の色にも、爽やかな氣は充ち満ちてゐます。

秋は收穫の時、勉學の好季節です。農家の取り入れの忙がしいのと同じやうに、學生は智識を求めぬのに忙がしい時です。智識を求めぬのに、二ツの方法があります。それは書物を讀むこと、物事を精密に觀察することとです。

皆さんは、書物を讀んで智識を増す、といふことを知つて居られるでせう。秋は讀書の好時期です。燈火をかき立て、靜かに書を翫きますと、あたりは靜かですし、身體は引き締まつて居りますし、讀むほどのことが、心の奥の底までも泌み渡るやうに、深い印象を與へます。斯ういふ時に讀んだことは、感じも強いし、記憶にも永く残りますから、その効果は非常に多いのです。

讀書に倦んだ時は、輕装して戶外を散歩するのが宜しい。秋の野は、草枯れ木の葉は散つて、春のやうな麗はしい眺めはありませんけれども、どことなく引き締まつた、人なつかしい感じが致します。秋晴れの、肌心地のよい日光を受けながら、野を過ぎ川を渡つて、何處ともなくさまよひあるくのは、どんなに楽しいこととせう。

郊外を散歩しますと、自然の美しい景色を見ると共に、そのやさしさを



味はふことが出来ず。而してまた、見るもの聞くものについて氣をつけさへすれば、限りなき知識を得ることも出来るのです。野末にころがる石の一ツにも、木かげに枯れゆく草の葉にも、見ようによつては、幾多の知識と教訓とが含まれてゐます。皆さんは、郊外を散歩する時、よくそれ等の事物を観察して、活きた知識を得るやうに心がけて下さい。

二ツの眼はあつても、心の眼が閉ざられて居ましたら、まるで走馬燈を見るやうなもので、何一ツとして記憶には残らないでせう。書物を読むのでも、たい浮の空で読み去りましては、その意味が十分に了解されません。されば、心の眼を開いて書物を読み、心の眼を開いて物事を観察するのが肝要なのであります。

### 九九 座右の銘

静子さんは、土曜日の夕方、自分の書齋に閉ぢこもつたまゝ、何か一心に考へ込んで居りました。

『どうしても私、座右の銘を作らなくちゃア、而して屹度それを守るやうにしたいわ。』

と、獨り言をいつて、ノートブックに書きつけては考へ、考へては書きつけてゐましたが、とうとう次のやうなものが出来上りました。

第一 私は正直で誠實でなければならぬ。私のやうなものでも、愛して下さるお友だちがあるのは、正直と誠實とのお蔭なのだから。

第二 私は常に、清い心を持たなければならぬ。少しでも濁つた考へや、邪な思ひが胸に浮んだ時には、この座右銘を出して見て、思ひ返す



やうにしたいものです。

第三 私は勇敢でありたい！ 女だからとて、心が弱くては、とても世の中に立つて行くことは出来ないのだから、いかなる苦痛をも堪へ忍ぶだけの、勇敢なる心を養ふのが肝要。

第四 私はすべてのお友だちに、親切をつくさなければならぬ。クリストは、汝の敵をも愛せよと仰せられました。況して、やさしいお友だちに對しては、あらん限りの親切を盡しませう。

第五 私は謙遜でなければならぬ。なせなれば、私は身體も精神も弱くて、何の長所も學識もないのですから。

第六 私はなるべく人に物を施したい。而して施したことを忘れてしまひ、人から受けた恩は、何時までもこれを覚えて居るやうにしたい。

第七 私は勤勉でなければならぬ。學なく才なき身は、勤勉より外に方

法がないのだから。

第八 私は常に、やさしい心と快活な氣性とを養ふやうに氣をつけねばならぬ。これは二ツとも、少女に最も大切な美德なのだから。

### 100 獨修の少女

卒業式もめでたく終り、花は咲き雲雀は囀つて、楽しい新學年がはじまるやうになりますと、皆様は暢びやかな心に、一種の新らしい希望を湛へて、學び舎の門をくゞられることとせう。

併し、その長閑な時、花も笑ひ鳥も歌ふ楽しい時に、何となく沈んだ心をもつて、身の行く末を案じて居る少女も、少なくはないとせう。即ち、新入學生の楽しい心に引きかへて、家事の都合で學校へ行くことの出来ない



くなつたものは、一種不愉快な感じがするだらうと察せられます。  
 『家庭の事情で、これからもう學校を止さなければならぬ。併し自分は學問が好きだから、もつと學校へ通つて勉強したい。もし出来ることなら東京へ行つて、女子にふさはしい仕事をしながら、一方でどこかの學校へ通ひたいと思ふが、さういふ便宜はないだらうか。何とかよい方法を教へて下さい。』  
 斯ういふ意味で、私のところへ手紙を寄越す少女だけでも、毎月きつと十數名はあります。もし日本全國を尋ねたら、同じ思ひに悶えて居る少女は、幾百千人の多數に上るだらうと思ひます。  
 私は、すぐれた學才を抱きながら、家庭の事情や身體の都合で、空しく草深い田舎に埋もれて居る少女を、心から氣の毒だと同情いたします。世の中には、さほど才能はすぐれて居なくても、家が富んで居るために、身

に餘る幸福な生活をして居るものさへあるのに、どうして一人の少女に好きな學校へ通はせることも出来ないのかと思ふと、實際情けなくなつて來ます。もし富める人が、一ヶ月の費用を節約したら、學藝にあこがれて居る不幸な少女を、一年も二年も好きな學校へ通はせることが出来るかも知れません。併し、世の中は自由にならないのです。たとひ富めるものが、貧しいものに恵んでやりたいと思つても、數かぎりのないことですから、とても平等に恵みを與へることは出来ません。また貧しいものも、故なくして富めるものから救ひを受けることを喜ばないでせう。  
 所詮、貧しいのも不幸なもの、しばらくの運命だと諦めて、その境遇が許す限り、一心不亂に務め勵むより仕方がありません。  
 貧しいとか不幸なとかいふのも、それ／＼程度があります。また他のものと比べて見て、はじめて自分の貧しいことが解り、不幸なことが悲しく



なるのです。それ故、自分より上のものを見れば、身の不運をかこちたく  
 なりますけれども、世の中は廣いのですから、不運な自分よりも、遙かに  
 貧しくて憐れなものゝことを思ひやれば、たつた今まで不運だと歎いてゐ  
 た自分の境遇も、心一ツで、非常に幸福なものとなつて、ひそかに感謝せ  
 ずには居られなくなります。

世の中に不幸と悲しみとは絶えない。何の心配もなさうに、無邪氣に  
 遊び戯れて居る少女の眼にも、時としては熱い涙の宿ることがあります。  
 他から見れば幸福さうな境遇に居るものも、人知れず悲しい思ひに心を痛  
 めることがあるかも知れません。人の羨やむやうな晴々しい姿をして、日  
 毎學びの庭に通つて居る少女の中にも、その家庭の冷やかさに堪え得ない  
 ものがあるかも知れません。もしさういふ少女から見れば、たとひ學校へ  
 は行かれなくても、父母弟妹とゝに暖かな家庭に居るものが、却つて羨

ましからうと思はれます。

家庭の事情で學校へ行かれない諸嬢よ、諸嬢はみだりに人を羨んだり、  
 身の不幸を歎いたりするには及びません。諸嬢と同じやうな境遇に居る少  
 女も、廣い世の中にはなかく多いのです。歎いたとて、急に家庭の事情  
 が變る譯ではありませんから、寧ろ自分の境遇で、出来るだけのことをす  
 るのが宜いのではないでせうか。況して、教育とは單に學問や技藝を修め  
 るばかりでなく、心の玉を磨くのが最も大切なのです。

高等の學校教育は受けなくても、自ら努め勵むとともに、暖かな家庭の  
 躰けと同情ある社會の教育とを受けて、立派な婦人となりさへすれば、そ  
 の結果は別に違はないではありませんか。望む所は、しとやかな婦人、氣  
 品の高い婦人となればよいので、學校はたゞその準備に過ぎないので。  
 いくらながい間學校へ通つても、自分から修養する考へがなければ、眞に



少女百話終

教育ある婦人とはなれなからうと思ひます。それよりも、事情によつては  
獨學自修して、早くから家事に慣れると共に、品性の修養をはかる方がよ  
いではありませんまいか。

明治四十四年七月  
明治四十四年七月  
日印刷  
日發行

(少女百話)

定價金四拾五錢

著者 沼田 笠 峰

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地  
大橋 新太郎

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地  
水谷 景長

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地  
博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區本町三丁目  
博文館

振替貯金口座東京二四〇

著作  
所有



# 博文館發行少女書類

福田琴月君著

## ●少女小説拾

### 兒

全一冊四六判大和綴  
石版極彩色口繪挿入  
紙數百七十頁 正金貳拾八錢  
郵税金六錢

- 天神祭
- 親切老爺
- 小看護婦
- 性は善
- 闇路一步
- 好い御主人
- 若様の熱病
- 天上の歡會
- 如何しやう
- 一寸こゝへ
- 捨兒は女神
- 遺言
- 上方見物
- 嵐山の別邸
- 三保の松原
- 保津川の大難
- 老女お君
- 附録
- 淺間神社
- 蝶峨野の隱宅
- 思はぬ昔話
- 少女軍使玉野

## 次 目

竹貫佳水君著

太田三郎君畫

## ●少女思出の記

全一冊四六判洋裝  
石版極彩色刷口繪  
挿入紙數二百六頁 正金貳拾八錢  
郵税金六錢

爰に優梨子と呼べる可憐なる一少女あり、世の荒波に引分けられて母に別れ父を失ひ、他郷に流離すること幾星霜、涙と共に記念の指環を抱いて都に上り、圖らずも幸福の手に救ひ上げられ涙繁かりし往事を追想して優しき筆にもしたる少女思出の記、同情深き大方の諸嬢よ、縋いて春の雨夜の友とせられよ。

河崎醉雨君著 (名和永年君畫)

## ●少女小説花子の行衛

全一冊四六判大和綴  
石版極彩色刷口繪  
紙數百八十頁 正金貳拾八錢  
郵税金六錢

花子は春野子爵の秘藏の令嬢也一日父母に從つて野外に遊び、忽然其姿を失ふ不思議! 不思議! 一覺に魅まれしか、猛獸毒蛇の口に罹りしか、忽ち世の疑問となり、一狂婦人ありて躍動神靈の如く、波瀾萬疊實に血あ涙あ一物語たる疑はず。

少女世界者 沼田笠峰君著 (柳原蕉園女史畫)

## ●少女スケッチ

全一冊四六判裝釘美  
石版口繪二葉入  
紙數二百四十九頁 正金參拾五錢  
郵税金六錢

美しい少女、やさしい少女、ハイカラな少女、感心な少女、快活な少女、ゆかしい少女、あはれな少女さまざまの少女の心と行のまゝに描いた平易な文章と趣味多い事實と小説より面白く記るされてあります。而も一種の教訓を味ふ事出來ます。少女諸子の御一讀を祈る



山岸荷葉君著

### ●少女小説 氏か育か

全一冊四六判洋裝  
石版極彩色刷口繪  
挿入紙數一八八頁  
正金卅八錢  
郵稅金六錢

- 次 目
- (1) 折檻
  - (2) 手傳
  - (3) 訪問
  - (4) 新聞
  - (5) 生死
  - (6) 暗夜
  - (7) 指環
  - (8) 俠氣
  - (9) 機嫌
  - (10) 世間
  - (11) 曙光
  - (12) 奇緣
  - (13) 招待
  - (14) 狂怒
  - (15) 投身
  - (16) 夢現
  - (17) 姿見
  - (18) 改心

中村秋人君著

### ●名媛と筆蹟

全一冊四六判裝釘  
瀟洒美本寫真版數  
葉挿入紙數三百頁  
正金四拾錢  
郵稅金六錢

●富美宮泰宮兩親王殿下、各宮妃殿下、各姬宮殿下三十方に、名流婦人、女子教育家、女流作家、女流畫家等四十二人の優しき美しき幽かしき愛らしき話を叙し附録として三皇孫殿下若宮殿下の御愛嬌と附人に關する數項を加ふ

●筆蹟は各宮妃殿下と名媛の書畫數十枚を挿む

●著者は虚榮虚飾の塵烟を厭ふて清を探るの年少氣鋭の健筆家なれば其觀察は著實にして精細其一句一章必ず教育的の意味を含み筆は縦横自在なれば讀んで面白き近來の快著也

東京女子高等師範學校教授

篠田利英君序

少年世界記者

竹貫佳水君著

### ●少女四季物語

全一冊四六判洋裝  
裝釘瀟洒美本  
紙數二百六十八頁  
正金卅八錢  
郵稅金六錢

口繪四葉挿入○春の少女○夏の少女○秋の少女○冬の少女(杉浦非水君畫)版石彩色頗美麗

- 次 目
- 春の少女
  - 夏の少女
  - 秋の少女
  - 冬の少女
  - むつつき物語
  - はつつき物語
  - やさよひ物語
  - うづき物語
  - さつき物語
  - みなつき物語
  - ふみつき物語
  - はつき物語
  - ながつき物語
  - かんなつき物語
  - しもつき物語
  - しはす物語
  - 四季の争ひ
  - 少女圖畫館

此書は表装や挿畫の美しいことは言ふまでもなく、書いてあることは利益になつてしかも面白うございませぬ。東京女子高等師範學校の篠田先生の仰しやいませぬには、私達の利益になる事柄の原理や原則は、之を學ぶにむづかしいものですが、此本はそれが面白くやさしく誰が讀んでも分るやうに述べてある。其藥は口に苦しと云ふ言葉がありますがこれは其藥であつて、口に甘い本でありますから、よく味つてお讀みになつたらよいでせうと。賣り切れにならない中にサア、みなさん一刻も早くお求め遊ばせ。



前田雪子女史抄譯

●家庭小説 小姫君

全一冊四六判洋裝 正金四拾五錢  
南京綴頗美本 郵稅金六錢  
紙數二百七十六頁  
慈愛深い父母の膝下で、嚴格な教育を受けて生育つた、最も睦ましい姉妹の姫君は、浮世の戀を夢む時、父母に由て定められた婿君を嫌つた。奇才に富み、頓智に長けた妹なる小姫君は、花もうら馳かし十七歳の年頃に、その機智を遺憾なく發揮し、嚴父慈母が豫想した婚約をがらりと外させ、日頃仲の好いお友達なる令嬢を媒介して、孰れも満足、しかも幸福なる三組の婚姻を成立させた手際の鋭敏な所、ナイーヴな所、是れ本書の主眼併せて善良な家庭の有様も窺はれる。

巖谷小波君著

●家庭小説 子供ごころ

全一冊四六判上製 正金九拾錢  
石版刷口繪挿入 郵稅金八錢  
紙數三百七十六頁

- 目次
- 乳母の家
- 親ごころ
- 兄思ひ
- 子の罪
- 嬢ちゃん
- 若様
- 神童

題して子供ごころと云ふ。内容は大方判じ得べし、蓋し子供を主人公としたる清新高雅なる家庭小説七篇を収めたるものは是れ也。著者は當代のお伽作家たる事は世既に定評あり。而かもそれと同時に巧みに少年少女を寫して紙上に躍如たらしむ、本書は即ち其傑作を集めたるもの苟も世の子煩悩者にして此書を座右に備へざらん乎、共に家庭を語るべからず、共に兒愛を語るべからず。

松居松葉君譯

●家庭小説 樂天小屋

全一冊四六判洋裝 正金四拾錢  
南京綴頗美本 郵稅金六錢  
紙數百九十九頁

米國に於ける八十萬の家庭は、此一冊の本の爲めに悲哀の淵から離れて、幸福の樂園に加はつたと申します。また紐育と倫敦とで此本を演劇に致しました時には、いづれも三百日以上大入をつづけまして、英國には此狂言ばかり興行致します一座が三組ほど出来ました、苦い、恐しい、穢ならしい小説ばかり流行る今の日本には、こんな甘い、愉快な、美しい、面白い小説を紹介する事は、必要であらうと信じます。

河井道子 辻村靖子共譯

●家庭小説 ひとりぼつち

全一冊 四六判 正金六拾五錢  
上製頗美本 郵稅金八錢  
紙數三百七十頁

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフイーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の「一少女を主人公として其天真を枉げ敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける親時描寫して紙上に躍如の由來日本の家庭小説中稀に見る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾教授河井辻村二女史譯述して世に公にす其内容の如きはこゝに喋々するを須あらず。



下田歌子女史著

# 少女文庫

全六册 和綴裝 正價金參拾五錢  
紙數一册二百五十頁 郵稅一册金六錢

- 全部
- 第一編 お伽噺教草
  - 第二編 内國少女鑑
  - 第三編 庭訓お伽噺
  - 第四編 外國少女鑑
  - 第五編 家庭の心得
  - 第六編 學校の心得

博學高識の名家たる下田歌子女史曩に家庭文庫全部十二卷を完成して普く女子の心得べき事項を網羅して懇切に其學藝を指導せられたるが故に世に此編を愛讀せらるゝ事他書の比にあらず今又少女文庫を起稿せられて少婦兒女の讀本に備へらる文辭壯麗挿圖又精妙を極めたり

大日本正風會々長 中島義弼君著

# 女子禮法教科書

全一册 菊判美本 正價金參拾八錢  
木版圖數十個挿入 紙數二百四十八頁 郵稅金八錢

## 高等小學校 高等女學校 各家庭用

本書は著者が多年の経験の上明治の今日に禮儀を以て根本的永久的に社會の改善を謀るが要務であると云ふ事を常に主張せられたる女禮式專門大家中島義弼翁が其の改善の方法を平易に簡明に編述し日本國民の母とし妻とし娘とし教師とし社員とし下女として幾分の禮節を知らしめんが爲め其の要點を摘み採りて網羅せられたるものなれば婦人諸子の業として座右に缺くべからざる寶典なり

侯爵夫人鍋島榮子 題詠 山脇高等女學校校長山脇房子女史序文

下田歌子女史 題詠 巖谷小波君、沼田笠峰君、木村小舟君、竹貫直人君共編

# 明治少女節用

全一册 四六判洋裝 正價金八拾五錢  
洋布特製金模樣入 紙數六百三十五頁 小包料金八錢

本書は 音樂。國文。茶湯。裁縫。編物。衛生。料理。刺繡。禮

法。體操。遊戲。日本歴史。外國地理。動植礦物。理化

天文。地文。算術。英語等荷くも日本女子の心得べき事項は一も残さず又別科には有益にして趣味豊富なる記事三十四題を集め記述面白く筆

法平易挿畫美に印刷製本又善美を盡しました少女諸は君宜しく一日も速かに此書を手にし一は學業の枝折とし一は娛樂の伴侶とし給はんことを希望致します

吉田 調子君著 裁縫と編物 全一册 菊判洋裝 正價金貳拾五錢  
紙數二百六十二頁 郵稅金六錢

刺繡術專門 實用刺繡術 全一册 菊判和裝 正價金貳拾五錢  
磯村大次郎君著 紙數百二十四頁 郵稅金四錢



# 少年少女の友お伽噺書類

(發行所)  
博文館

一〇

- |                  |                  |                      |                   |
|------------------|------------------|----------------------|-------------------|
| 與謝野晶子著           | ●おとなしき少年少女       | 全一冊四六判上製<br>口繪十數葉挿入  | 正價金五拾錢<br>郵税金六錢   |
| 世界お伽噺<br>完成記念出版  | ●お伽花籠            | 全一冊四六判特製<br>彩色口繪十頁入  | 正價金七拾五錢<br>郵税金八錢  |
| 巖谷小波先生<br>渡米紀念出版 | ●お伽寶船            | 全一冊四六判上製<br>彩色口繪十五頁入 | 正價金七拾錢<br>郵税金八錢   |
| 巖谷小波君著           | ●むかしく            | 全一冊 菊判特製<br>二色刷 頗美本  | 正價金壹圓拾錢<br>小包料金八錢 |
| 諸星絲遊君著           | ●古代ざりしやお伽噺<br>神話 | 全一冊四六判表紙<br>金模様入 頗美本 | 正價金六拾五錢<br>郵税金六錢  |
| 現代お伽作家<br>十二名作   | ●お伽テーブル          | 全一冊四六判上製<br>美麗なる口繪入  | 正價金六拾五錢<br>郵税金八錢  |

- |        |                |                      |                   |
|--------|----------------|----------------------|-------------------|
| 巖谷小波君編 | ●改訂日本お伽噺<br>袖珍 | 全一冊 袖珍函入<br>彩色口繪廿四枚入 | 正價金壹圓拾錢<br>小包料金八錢 |
| 巖谷小波君編 | ●改訂日本昔噺<br>袖珍  | 全一冊 袖珍函入<br>彩色口繪十四枚入 | 正價金八拾錢<br>郵税金八錢   |
| 巖谷小波君著 | ●お伽七草          | 全一冊四六判上製<br>彩色口繪挿入   | 正價金七拾五錢<br>郵税金八錢  |
| 木村小舟君著 | ●教育お伽噺         | 全一冊 菊判和裝<br>彩色口繪挿入   | 正價金四拾五錢<br>郵税金八錢  |
| 水野和一君譯 | ●七勇士物語         | 全一冊四六判美本<br>三色版口繪入   | 正價金貳拾五錢<br>郵税金四錢  |
| 巖谷小波君著 | ●お伽新八犬傳        | 全一冊 菊判美本<br>紙數二百三十頁  | 正價金貳拾四錢<br>郵税金六錢  |
| 巖谷小波君編 | ●合本世界お伽噺       | 全十冊 菊判上製<br>表裝華麗美本   | 正價各金壹圓<br>小包各拾貳錢  |

●此外弊館にはお伽噺書類種々有之候間御注文被成下度尙圖書目  
録御入用の方は往復葉書にて御申込み次第直ちに送呈可致候



IFY12

東京市精華  
高等小學校長  
加藤忠三郎君著

●發行所 博文館

學校 家庭 兒童 講話 資料

全一冊四六判上製  
紙數二百九十六頁  
正價金卅五錢  
郵税金 六 錢

本書は學年始たる四月一日に起り、學年の終たる三月に至る迄の間、或は、**偉人の生誕は死亡は若く事業成功の日に** **教訓を示し或至誠忠孝** 百世の下、欽慕敬仰するに足るの**忠臣義士の事蹟**を述べて趣味を感ぜしむるの裡に**歴史に通** 日月の順序を追うて編著したるもの**子弟教育完成の實を擧**げんとす。 **日常の参考**に供せられ一本を座右に備へて

●資料 子供の聲

瀬川頼太郎君編  
(諸大家批評)

全一冊四六判上製  
紙數三百八十七頁  
正價金五拾五錢  
郵税金 六 錢



